

「生存者」 ツインターボ

しが

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少女は走る、残り少ない命と共に。

少女は走る、己の生きていた事を歴史に刻むため

少女は貫き通す、絶対に諦めないことを

※ツインターボ師匠の性格改変ものです。ツインターボは史実において10歳で亡くなり、その命を燃やし尽くして走ったと言われており、史実に近づけたツインターボ師匠はお馬鹿で素直な元気いっぱいな天真爛漫なウマ娘ではありません。短命で薄幸な覚悟ガンマリ系ロリです。

目次

第一部 『中央トレセン学園』

# 0	Twinn Turbo	1
# 1	Girl's Incident	18
# 2	Welcome to Tea	31
# 3	I'll Never Give	44
# 4	Re:birth	57
# 5	Blown away	70
# 6	Blessing and	84
	mperror and...	

# 7	This is...	100
# 8	yet...	126
# 9	Legends	146
# LAST	Survivor	
174		

第一部 『中央トレセン学園』

#0 Twin Turbo

「ふんふーふんふふふーん♪」

「どうしたのターポちゃん、すぐぐご機嫌ね？」

「このけんしん…？が終わったらターポの好きなもの食べさせてくれるんでしょ!?!おかーさん」

「ええ、そうよ。だから最後までいい子で待ってましようね」

「はーい」

「でも、ターポちゃんは何が食べたいの？」

「カレー…ラーメン…ハンバーグ…色々食べたい！」

「あらあら、本当に元気ねえ…。でもそんなにたくさんは駄目よ？」

「はい…。ターボ、ウマ娘だから全部食べられるのに…」

「ウマ娘でもヒトでも食べすぎが駄目なのよ、ターボちゃん」

「ちえっ…」

「ツインターボさん」

「あ、先生。ターボちゃんの健診結果はどうでしたか？」

「それについてお話がございます」

「…何でしょうか？」

「結論から申し上げますと…ツインターボさんは長くは生きることが出来ないでしょう。…おそらく20を超えられるかどうか」

「……………え？」

ナイスネイチャには変わった友人がいた。クラスの隣の席に位置し、授業中はいつもその側頭部を視界に入れながら授業を聞き、そして休み時間などにはたまに話す。

彼女は背が低く、クラスの中で数えても下の方で、いかんせんその身長から見た目から来る幼さが際立つ。しかしその人物像は成熟しているという一言では言い表せなかった。ナイスネイチャ自身、幼少期からお年寄りのコミュニティで生まれ育つため若いながらも老成した価値観の持ち主だったが彼女のそれはお年寄りに感化されたものや背伸びした身の丈を超えたものではない。

達観しているといえればいいのか、末期の老人のような心理か。それらはすべてその友人のみぞ知ることに他ならない。

そしてまたなんと幸運なことか、現状にナイスネイチャしかいなかったチーム・カノープスにはその友人が加わり皮肉か何か、彼女とはクラスメイトでチームメイトとなつた。

「ターボ」

友人の名を呼ぶナイスネイチャ。その瞳には青く幼く、そして誰よりも老いている友人が映つた。

彼女の名はツインターボ。後に名を轟せることになるそんなウマ娘だが、今はそんなことを知る人はいない。いないつたらないのだ。

「…ネイチャ、何？」

「これ、トレーナーさんから。『ターボさんの希望するトレーニングメニューを組みました。目を通しておいてください』って渡されたよ」

ナイスネイチャが渡したのは分厚くファイリングされた紙束だった。常人ならばその量から正直目を背けてしまうが、彼女においてそれはなかった。

「…流石南坂トレーナー。相変わらず分かりやすい」

すらすらと要領よく資料を読みほどこいていくツイインターボ。そこに逡巡の意志はなく快適そうにその蒼い瞳は紙の上を走っていた。

「良くもその分厚いのすらすら読めるよねえ…最初渡されたときネイチャさん的には『辞書?』って思っちゃったっていうのに」

「速読はコツさえつかめば誰にでも出来ること。それに…私たちは動体視力も優れているからそれを上手く活用できればこの程度は苦じゃない。それに何よりも南坂さんの作る資料がそれを踏まえてるから」

淡々と感情もあまり込めていない言葉で返すツインターボ。その間も口は動いていても目は資料から離れていなかった。ネイチャはやれやれと呆れたように大袈裟なジェスチャーを取った。

「流石学年成績上位常連は言うことが違うねえ」

「…それは嫌味のつもり？ ナイスネイチャ。」

そしてターボの視線がやつとネイチャに向けられた。おどけたようなネイチャはようやくと言った視線をターボに向けた。

「やつと顔上げた。それ読むのも大事だろうけど、今はそれよりほかにやるべきことがあるんじゃない？ ターボ」

「…やること？」

はてと首をかしげるターボ。そしてやつぱりかと呆れたネイチャ。

「今日はアタシとウイニングライブの練習する予定でしょーが。トレーナーさんもあれだけ言ってたでしょー？」

「…そういえば」

完全に忘れていたという表情のターボの手を引き、ネイチャは連れ出す。

「ウイニングライブもレースの一部で、勝ちを手に入れた者の特権なんだから蔑ろに出て来るもんじゃないっていうのはターボも分かってるんでしょー」

「…それはそう」

仕方なし、ネイチャの言うことは正論だとターボは渡された紙束を鞆にしまうとネイチャに引かれるままに歩き始めた。…と、ネイチャとターボが教室を出る瞬間、一人の女生徒とすれ違う。

「あれ、ネイチヤ。今日はもう帰るの?」

「テイオー。いやあ…帰るは帰る…けど今日はちよつと気色が違うと言いますか…」

ターボとネイチヤと同じクラスの少女、才能あふれる若き天才「トウカイテイオー」だった。

「どういうこと?ボク、ネイチヤの言わんとしようとしたことが分からないんだけど…」

「えーと…。それは。別にやましいことではないけれど少し気恥ずかしいと言いますか」

そして何故か膠着状態に陥っている二人の間にメスを入れたのは他でもなく、待たされているツインターボであった。

「もう、良い?ネイチヤはこれから私とウィニングライブの練習でカラオケに行くから」
その言葉でようやくテイオーはターボの方を向いた。まるで今まで眼中になかったように。

「キミは……ダブルターボだっけ？」

「ツインターボ」

なお名前を間違えられたら物凄く早い速度で訂正するものとする。

「んー、テイオー。そういうことだから今日はこれでごめんね」

「まあ、そうだよ。ウイニングライブも必要な練習だからね。じゃあね、ネイチャ」

手を振りながら別れるテイオー。その姿にターボは何処冷めた目線を送っていた。

「…えつと、ターボ？」

「何？」

「…やっぱ怒ってる？」

「別に。トウカイテイオーは私に興味なんてないことはもう分かり切ってることだから。今さらそんなことで怒ることはしない」

ツンと冷めた物言い。ツインターボはトレセン学園中等部の学舎を後にするのだっ

た。

そしてカラオケ。優待チケットを使用し、二人は歌の練習を始めていた。

「あれ、いつの間にかターボ、歌上手くなった？」

「そんなに直ぐに上達するものじゃないから。…この喜天烈な歌詞に慣れてきただけ」

ターボが歌っていたのは『うまびよい伝説』。ウィニングライブで披露する代表的な曲で、所謂電波ソングである。

「電波ソングなんて初めて触れたけどやっぱりこの歌詞はどうかしている」

「あー、そりや同意。アタシも流石にこれはどうかと思う。まあ、歌うけどさ」

やれやれと言った顔のネイチャ。ターボはその次の曲を

入れている。

「次は何の練習する？」

『Make debut』。ジュニアクラスならこの辺をマスターしておけば大体何とかなるから」

「よし、じゃあアタシも。パート分けは？」

「センターはネイチャで良いよ。量をこなしたいから私は二位と三位やるから」

「了解、せいぜいキラキラしたライブにしましょう。カノーパスにもあと一人くらいメンバーがいると楽なんだけどねえ…」

ま、無い物ねだりしてもしようがないかとネイチャは嘆息し、そして楽曲が始まった。

「…こんなもので終わり、かな」

「そうだねえ。二時間半って所だからボチボチ切り上げって行きましようかね。ターボ、今日は夕食はどうするの？」

「…特に決めてないけど」

「じゃ、ファミレス寄らない？」

「……分かった。」

この時、ターボはフラリと立ち眩みを起こし、嫌な予感を感じていた。

それは二人がカラオケからファミリーストランへ向かう時の道中。ツインターボは立ち止まり、そして眩いた。

「……………あ、やば」

「え？ちよつ、ターボ!？」

視界が歪む。世界が反転する。確定的にしていた事象が不確かな物へ変質する。赤く染まり、そして青く染まる。今まで確かに踏みしめていた地面から感じる重力が何も感じなくなる。無重力の身軽さと同時に空から落ちていく、そんな気分。そしてやがては地面へと叩きつけられてしまう。

意識を手放す直前、青い瞳はネイチャを捉え、そして最後に告げた。

「ごめん、任せた」

「ターボ!？」

そしてバタリ。小さな音だけを立ててツインターボはその小柄な体を地面に落とし、口から赤いモノを溢しながら。

「ど、どうしよう……………!？」

ナイスネイチャは動転していた。それも当然だ。友人が急に血を吐き倒れたからそれで平常心に成れるわけがない。困惑を振りきるためにナイスネイチャはとりあえず救急車を呼ぶとスマートフォンを出したが…

「ネイチャさん、彼女の頭を地面より高く保ってください」

そこに現れたのは救いだった。

「ト、トレーナーさん!？」

チームカノープスのトレーナー、南坂がそこにいたのだった。何時もの柔和な顔はなく、厳しく険しい表情だった。

「既に手配はしているので救急車は大丈夫です。離れていてください、回復体位にします」

「わ、分かった!」

南坂はいやに手馴れた様子でその処置を施す。そんな中、ネイチャは疑問をぶつけざるを得なかった。

「トレーナーさん、ターボは…何で急に倒れたの?」

「…ターボさんはネイチャさんに話していなかったようですね。…ターボさんの身体は非常に貧血に陥りやすいんです。このように倒れることもそう珍しいことでもなく…ですが、ネイチャさんの前では初めてだったようですね」

「ターボにそんなことが…ていうか何でトレーナーさんがここにいるの?」

「今回は偶然です、私も今日は夕食は外食にしようと思っていたので」

…そして南坂は険しい視線を倒れているターボに向けられていた。

「…このままでは長くは保ちませんよ、ターボさん」

『ど、どう言うことなんですか、先生、ターボちゃんが長く生きられないって！』

『…ここではツインターボさんに聞こえてしまうのでお母様。どうぞこちらに』

『……………ん？』

無垢ではいられなくなった。幼くはいられなくなった。無知なままではいられなくなった。

何も知らないあの頃のままでは彼女は許されない立場になってしまった。

「…あつ」

彼女の視界に映ったのは白い天井。それだけでツインターボは自身に何があったかを察した。

「…またやつちやつたか」

はあと溜め息をついた。彼女の頭痛の種がまた増えた瞬間であった。

上半身を起こし、周囲を見渡す。ズキズキと頭は痛むがこの偏頭痛とも長い付き合いだ。今更どうこう思うことはない。周囲に他に患者の姿はない。

ターボは己の手をグーパーと開くように動かす、そして足が動くかを確かめる。しっかりとまだ動く事に安堵する。

「まだ、まだ私は…ターボは走れる」

それは心からの安堵。そして焦燥から来る言葉。まるで誰かに、自分に言い聞かせるようにターボは口に出して呟いた。

ナースコールを押し、看護師を待つ。病室には花が挿されており、誰かが見舞いに來ていたらしい。ナイスネイチャか、トレーナーか。どちらでも良いか、とターボは自己完結する。時計を見る、時刻は11時を指している。

「明日は検査。明後日には退院か…トレーニング増やさなくちゃな…」

出来なかつた遅れを取り戻すにはトレーニングを更に積むしかない。ノックが聞こえる病室の中でツインターボは明日からの未来を生きていけるのか、そんな想いを馳せるのだった。

「ターボ、それなに？」

「座右の銘、かな」

それは書道の授業の時。ツインターボとニスネイチャは席が近いため話すことも多い。

「うわ、達筆…ターボ、そんな特技あったんだ…」

「字は書くのは得意。でもそれだけ」

『『一日一全』…ありや、これ一日一善のこと？誤字？』

「誤字じゃないよ。というかそんなこと間違えないけど。……造語だけど。『一日一日に全てを出しきる』。私は悔いなく生きたいんだ」

「おー、そりや良いね。確かにそれが出来れば、素敵なもんだね」

「…出来ればいいね。私にどれだけ出来るか、解らないけど」

——ターボが生きていたという事を刻んでやる、この歴史に。

少女は走る、残り少ない命と共に。

#1 Girl's Incident

走る、駆ける、進む。

夜半の坂路を青い風が駆けていく。風を切り裂きながら閃光は物凄いスピードで誰も通らない道を進む。

走ってるの言わずもがな、ツインターボであった。坂路は中々に傾斜が急で、普通の人間ならば走るのはおろか、歩くことさえ辛い道であった。その坂路をツインターボは駆ける。息を切らしながら更に加速し、遂には坂路の上り坂を走り終え、いざ下り坂となった時に青い風はその加速を停止した。幾らかの慣性を残して停止したツインターボは坂路の頂上で脇道の山道に入り、そして木の根に吐き出した。

「ガハッ！ゲホッ！ゴホッ!!」

びちゃびちゃ。そんな生々しい音を立て、吐き出したものは胃液。そして何よりも赤い液体。血液だった。ツインターボは激しく咳き込み、苦悶の顔を浮かべながら、心臓を押さえていた。やがて、少しの沈黙。ツインターボは己の用意していたハンカチで血と胃液の混じった液体を拭くと、寄りかかっていた木に向かつて

「……………クソツ!!」

拳を打ち付けた。脆い木の幹はそれだけで破壊されてしまう。装甲の剥げた木は揺れるが所詮、それだけだ。ツインターボは木の下に座り込み、息を激しく切らしながら呼吸を整え始めた。

「……………して」

それは悲嘆から来る言葉か、それとも虚無から来る言葉か。誰に告げるでもなくツインターボは嘆いた。

「どうして、私の身体はこんなにも弱いんだろう…」

己の小さい拳を見て、血のにじんだ拳を見て、ツインターボは弱く呟いた。

ウマ娘の身体能力。それは遥かに人間を超越したものだ。本気を出せば時速70 kmを超えて走ることが出来、コンクリート程度ならば容易く砕くことが出来る脅力を持つ。

ツインターボもその例に漏れず、身長146センチと小柄ながらも、本気を出せばかなりの速い速度で駆ける事が出来る。先程のように山道を全力ダッシュというのもウマ娘だからこそ出来た芸当だ。

それにツインターボの最大加速時の速度は他より抜きん出ていると言っても過言ではない。十全ならばサイレンススズカにも食らいつける程だ。だが、彼女には一っだけ決定的に欠けている物があつた。

「…スタミナ、か。」

それはスタミナ、持久力だつた。どれだけ速く駆けても維持する体力が彼女には圧倒的に足りていなかった。そのスタミナを身に付けるためツインターボは熱心に坂路のトレーニングに勤しんでいたが貧血が起こりやすい体質が災いし、このように咯血することなど日常茶飯事だつた。

あくまで普通のウマ娘ならばスタミナが足りないだけならばへ口へ口になるだけで済む。だが、それだけで済まないのがツインターボというウマ娘だつた。

ツインターボの脳裏に8歳の時に医師から告げられた言葉が反芻する。

『ツインターボさんの心臓は本格化に追い付けません。』

ウマ娘には「本格化」と呼ばれる現象がある。ある時期になると急に体躯が伸び、飛躍的に身体能力が向上する。それがおおよそ11から12歳の間に起こり、ウマ娘は競技用の身体能力を完全に手に入れる。それが本格化と呼ばれる現象だった。

本格化前のウマ娘は勿論、同年代の子供たちに比べれば当然、高い身体能力だが、それはあくまで子供にしたらと付く。ウマ娘の幼少期は言うならば殆ど人間と大差はない。だが、本格化すると身体能力が追い付くために臓器も強靱な物となる。時速70キロを超える速度で走るため当然、心臓の処理速度もそれに耐えられるものではないといかないからだ。勿論、肺も飛躍的に向上し、全体的に強靱な身体に作り変わる。

しかしツインターボというウマ娘はそうはいかなかった。

彼女の状態を表すならば、ウマ娘という規格外のハードに対し、人間の心臓という型落ちのソフトウェアで無理矢理動かしていることになる。当然そんな無茶な運用をす

ればハードに追い付けず、ソフトウェアに反^{バックファイア}動が来る。それが、貧血という症状で現れている。ヒトの心臓ではウマ娘が求め得る血液を回しきれず、結果的に血が足りなくなる。

更に彼女にとって悲劇的とも言えるのは彼女はまだ本格化の途中ということだ。型落ちのソフトウェアを常時持つている身体では本格化というアップデートの速度も遅い。だからこそ、まだ貧血で済んでいる。しかし、本格化というアップデートが100%完成してしまった暁にはどうなるか。

「……………死。」

人の心臓というソフトウェアにはウマ娘の本格化という最新機能を使いこなすだけの能力はなく、やがてバックファイアで自壊する。

更に悲劇的と言うべきなのは、身体が無理矢理規格に合わせて来るということだ。もしもツイーターボが走ることを止めたとしても型落ちのソフトウェアに対して規格外のハードウェアは適用を求めてくる。勿論、動かせる筈もなく、死ぬ。

「…猶予が…」

20歳。彼女の身体はそれで完全に本格化する。そして心臓は耐えきれず、彼女の身体を破壊するだろう。

「本当っ……世の中って不平等だよね……」

ウマ娘という規格に耐えられる心臓を持つて生まれなかったことはただの偶然の産物に過ぎない。だからこそこの悲劇が起きているのだろう。

ターボは立ち上がる。坂路に戻り、構えて、そしてまた坂を駆け出した。文字通り、命を燃やすという行為を伴いながら。

最初の兆候は10歳の頃辺りだっただろうか。本格化の兆候が見え始め、ウキウキしていた体育での授業。全力疾走して、気持ち良さに浸っていた時。彼女は貧血で倒れた。

そしてそれから貧血という悪夢は月に一回、週に一回と数を増やしていった。10歳の時に、ツインターボは母親から残酷な真実を知らされた。

元来、ツインターボとは快活で、元気が溢れ、そしてお馬鹿な少女だった。勉強は苦手而走るのは得意で好きという身体を動かしているのが好きな子だった。いつも笑顔に溢れていた無垢な少女はその日から笑顔を失ってしまった。

無垢でいられなくなった少女は、その後、中央トレセン学園の門戸を叩き、筆記、実技共に次席という優秀な成績を修め、入学した。首席は本当の天才と称される彼女であつたが。

滅多に笑わない学年次席を他の娘たちは最初は面白がつて見ていたが頻繁に授業に出ていない姿を見て、やがて興味を失くした。サボっていたと思われていたようだが実際は貧血でぶつ倒れて保健室送りになっていたのが真実だが。

ツインターボは才覚をメイクデビュー……つまりデビュー戦においても發揮した。全員が新人だったというハンデこそ付いていたが、ツインターボは大逃げで他を離し、独走状態で一着に入った。そしてその後、血を吐いて倒れた。

ツインターボはチームに入つてこそいたが、正直厄介者扱いだった。頻繁に倒れるウマ娘をトレーナーは抱えている余裕はないと突き放されてしまい、次の所属チームを探

している折に、シンボリドルフ生徒会長からチームカノープスと、南坂トレーナーを紹介され、これ幸いと彼女はカノープス入りを果たしたのだった。今まで隣に居ながらも接点の無かったナイスネイチャと奇妙な友人関係を築きつつも、ツインターボは身体作りに励んでいた。

彼女の命が残り少ないと聞き及んでいるものはそう多くない。

カノープスのトレーナーの南坂、生徒会長のシンボリドルフ、理事長の秋川やよいとその秘書、駿川たづな。そして彼女自身と両親。それ以外の人物には徹底的に秘匿され、そして漏らされていない。それは一重に彼女の意思を尊重してこそだった。

ツインターボはどう足掻いても死ぬ、それまでに彼女が存在したという歴史をこの世界に刻む。それこそが、今の彼女にとっての全てだった。

「ハッ…ハッ…ハッ…！」

下り坂は上りに比べ加速が激しくなる。だが押さええて走ることが出来るならば上りより格段にスタミナを温存できる。彼女は今、それを実践していた。そして急勾配の下りも中腹。そこに差し掛かった時、急にヒトが現れた。視界は確保が難しく人がいるか

も定かではなかった。故に急に現れたヒトに対処は難しく。

（ぶつかる……！）

そう直感的に察した彼女は急ブレーキをかけた。目の前の人物との距離はどんどん縮まる。

（間に合わ……）

間に合わない、そう確信した瞬間に彼女は数秒先の惨事を想像してそれを回避するために横に跳ぼうとした……が。

そして、ドンとぶつかり、ツインターボは尻餅をついた。

「いたたっ……」

そして恐る恐る目を開けると、ぶつかった件の人物は随分と向こうに……倒れて

「ご無事ですか？」

いなかった。仁王立ちしてた。そしてこちらを気遣うように手を差し伸ばしていた。

「ええ……」

と。ツインターボもこればかりには困惑の声を漏らさずにはいられなかった。なんでき

「おや、貴方は。」

改めてその人物を見る。その人物はウマ娘だった。メガネをかけた長身の少女はぶつかったことなど何の揺れではないとメガネを直し。

「初めまして、ツインターボさん。私は……イクノデイクタスと言います。」

そしてクールにキメ顔でそう言った。

夜の公園といったら、街灯と月明かりしか光が無く、実に心が不安にされる場である。そんな不安な場に二人のウマ娘がいた。

「どっぞぞ。」

「どっぞ、どっぞも。」

語るまでもなくイクノデイクタスとツインターボだ。イクノデイクタスはターボにスポーツドリリンクのペットボトルを渡していた。ターボは遠慮がちにそれを飲みながら同校のウマ娘を伺った。

「先程は申し訳ございません。私の不注意でぶつかってしまつて。」

イクノは頭を下げ、ターボはいいやいと恐縮するように

「えつ、いや、そんな、私の方こそ全然止まれなくてどっちかというと私が全面的に悪いというか…」

イクノはふむ、と思考し。

「ではここは両成敗という形にしましょう。ツインターボさん、申し訳ありませんでした。」

「いえ、こちらこそ…すいません…。」

とにもかくにもこの問題は解決。だがツインターボの疑問は解消されてなかった。

「ええと…イクノデイクタスさんは何でターボ…私のことを知ってたの？私の間違いじゃなければ初対面だったような」

「はい。その認識で間違いありません。私が一方的に知っていただけですから。」

イクノは肯定する。ターボの疑問に。だがそれが更に加速させる。

「…どうして?」

「…貴方はあまり、自分の貴重さを理解していないようですね、ツインターボさん。その学年の次席ならば注目を集めて当然ですよ。」

「…そっか。」

言われてみればそれもそうだという話だった。

「…って、同学年?」

失礼を承知な印象だがターボはイクノから大人びた雰囲気を感じており、上級生のように見えたが。

「はい、同学年です。ワケアリで一年ほど停学していたため、本当の年齢はあなたの方より一つ高いですが。」

間違いではなかったとターボは己の直感が正しかったことに安堵した。

「そっか。それは大変だった…でしたね。」

「同級生ですから砕けた話し方でも私は気にしませんよ。」

「そう?なら正直、助かるよ。」

そう言いつつもイクノは敬語だが、これが素であるようである。

「二年停学って…それはチームとか大丈夫なの？」

「大丈夫ではないですね。所属していたチームもすでに抜けています。自分の身の丈に合うチームを探していましたが如何せん、時期も微妙なため、中々チームに入れてません。」

そう語るイクノは冷静でありつつ、気落ちしているようだった。そんな彼女の様子に、ターボは脳裏にキャプテンの言葉を思い出した。

「……ねえ、イクノデイクタス。もし、良かったら——」

少女は出会う、己を磨く、切磋琢磨する仲間を。

#2 Welcome to Team Canopus

S

チーム・カノープスは吹けば飛ぶ弱小チームである。そもそもメンバーがキャプテンとプラス一人しかいないため、吹き飛びやすいというのもあるが。

学園最強のチーム・リギルは徹底した管理方針でウマ娘の持つパラメータを効率良く引き出し、東条ハナの徹底したデータ管理のお陰で数多くの優秀なウマ娘を排出している。しかし締め付けが強いせいか、不満を持つものも少なくはない。

一方で対照的なのはチーム・スピカだった。担当トレーナーの方針は殆どウマ娘たちに投げやり。いざここの一番というところではトレーナー自身が重い腰を上げて、直接指導するが普段はウマ娘たちにやらせたいことをやらせている。自分のペースでやりたいウマ娘たちには相性がいいが、指示待ちだと相性が悪い。かつてはその点が危機を招いたこともあった。しかし、癖が強いウマ娘が集まりつつも中々強豪なウマ娘が所属している。

では、その吹けば飛ぶチーム、カノープスの方針は？とえば、リギルとスピカの中

間とも呼べる体制だった。ウマ娘のやりたい方針に可能な限り配慮し、寄り添いつつも管理すべき所はしっかりと押さええている。だからやりたいことをやりつつも手綱を握ることが出来ている。カノープスのトレーナー、南坂は一見頼りない優男のように見えるがこれが実際、かなりのキレ者で無茶なローテでも難なく組んで見せる。そんな南坂の元に一人のウマ娘が訪れていた。

「我ながら無茶な組み合わせということとは理解しています。しかし、一年の遅れを取り戻すためには私はこの量をこなさなければなりません。」

きっぱりと言い切るメガネのウマ娘、イクノデイクタス。そんな対面に居るのはカノープスのトレーナー、南坂である。彼は手に分厚い紙束を持っていた。それに目を通しながら。

「イクノデイクタスさん。」

「はい。」

「確かにチームカノープスはメンバーを随時募集しています。では、何故ここに入ろうと思ったかの決め手をお教えください。」

「そうですね…直接の原因は彼女…ターボさんに誘われたことです。後は、南坂トレー

ナーならば私の要望にも答えてくれると言ったことでしょうか。」

南坂は紙束を下ろすと、優しい瞳で見つめた。

「合格です。歓迎しますよ、イクノデイクタスさん。」

「それでは、あのトレーニングを了承して頂けるということでしょうか。」

「はい、約束します。私の方から多少なりとも手を加えさせていただきますが、概ねはイクノデイクタスさんの要望通りに。」

「…あの、私から言い出したことですが、本当に可能なのですか。あの無茶な量を。」

「ええ、可能です。それに無茶と言いつつもイクノデイクタスさんの出した案は理に叶っています。これならば私から修正する箇所もそう多くはありませんよ。それに…」

南坂の視線は部室でトレーニングをしているメンバーに向けられている。

「289…290…291……」

「ほらほら、あと10回、頑張れ頑張れ！」

そこには片手腕立て伏せするツイントーボとそれを鼓舞するナイスネイチャの姿があった。ツイントーボの顔は今にも死にそうなものだったが決して手は止めない。その様子を見つつ、南坂は優しい声で

「それに、無茶なトレーニングをするウマ娘に慣れていきますから。」

それが誰かだなんて語るまでもないだろう。

「これからよろしくお願いします、イクノデイクタスさん。」

「…！はい、こちらこそ。よろしくお願いします、トレーナー。」

「ということで、チーム・カノーパスに新しい仲間が加わることになりました。イクノデイクタスさん、自己紹介をどうぞ。」

「イクノデイクタスです。一年、停学をしていたためお二人と同学年です。これから、共に切磋琢磨出来ることを願っています。よろしくお願いします。」

一礼、イクノデイクタスはお辞儀をし、ターボとネイチャは拍手を送った。

「よろしく、イクノデイクタス。」

「よろしく〜。」

「ツインターボさん、その節はどうも。お世話になりました。」

「ああ、全然気にしなくていいよ。∴元々こつちも人手が欲しかったという気持ちもあるから。」

「そうそう。しかしターボだったら良くやった。これでうちも少しはまともなチームになりますかねえ…。」

ネイチャはキャプテンである。故にチームの存続にはそれなりに危機感を覚えている。

「いっそ、今までの貼り紙、全部剥がして新しいのでも作ってみるとか?」

「悪くない案ではあるけどそれを誰がやるのさっていう話なんだよねえ。」

「確か、これがカノープスの募集ポスターでしたね。これを作ったのはトレーナーでしたか?」

「そうですね。アピールするポイントを書き出していますがやはりあまり私には適正が無いようです。ターボさんやネイチャさんが去年、G1に出てくれたお陰で多少名は知れていますがやはり一着を取れないと宣伝効果もあまり高くありません。」

「うっ。それは…」

「ゴ、ゴメンナサイ…」

ふと、ナイスネイチャは何かを思い付いたのか、ツインターボを見ながら言った。

「ターボ、ちよつといい?」

「…いいけど、私に何をやらせるつもり?」

「いやいや、そんな、難しいことじゃなくてちよつとね。達筆なターボさんを見込んで。」

メンバー求む!チームカノープス!輝け 個性

「おお」

「これは…」

「そんなに見られてると流石に居心地が悪いんだけど…」

半刻後、習字道具を持ち出したツインターボはカノープスの部室にて、軽く習字をしていた。勿論、理由はカノープスのメンバー募集用のポスターを作るためである。

「凄いいじゃん、これだけならシンプルだけどあのデータの箇条書きよりよっぽど見栄えいいじゃん!」

「意外…と言ったら失礼ですが、ツインターボさんは優秀な特技をお持ちなのですね。」

「無駄におだてられても困るよ。気恥ずかしいし。」

その見事な達筆を披露したツイインターボだったが、南坂の方を見て。

「良いの？トレーナー。これを募集用のポスターなんかに使って。」

「はい、私も賛成です。こちらの方が人目を引きやすいのも事実ですから。申請は私がしておきますね。」

「ふむ、それでは…私はこれの印刷をしてきましょう。」

「そうなるのアタシとターボは…」

「今まで貼ってあったポスターの回収じゃない？」

「それだ！」

思い立ったが吉日、チームカノープス、新メンバーを迎えてから新たな仕事は更に勧誘を増やすことだった。

「ではツイインターボさん、この紙はお借りします。」

「ああ、全然どうぞ使っちゃって。大したものでもないから…それと。」

イクノデイクタスが部室を出る瞬間に、ターボは声をかけた。

「私のこと、ターボでいいよ。長いでしょ。」

「……」

イクノデイクタスは一瞬驚くと、そしてフツと笑った。

「では、私もイクノで良いですよ。長いですからね。」

「え、それならアタシもネイチャがいいんだけど。」

その時、大きな風が舞い上がった。木々を大きく揺らす風で、不幸なことに一人のウマ娘がその大きな風の被害を受けることになった。

「キヤア………凄いい風だったなあ………ってあれ!? 帽子は!? 飛んでった!?!」

彼女が被っていた帽子がその強風に煽られて、飛んでいってしまったのだ。キツチリと耳を通してあるウマ娘用の帽子である。本当にそうか？

「ちよ、ちよつと待って!!」

少女はウマ娘特有の脚力を使って、風に飛ばされた帽子を追う。見失うことはないが

如何せん、高い場所に飛びすぎている。やがて風が勢いを失ってそれに乗っていた帽子も落下していく。

一方、同時刻。

「流石にこれちよつと刷りすぎじゃない？」

「イクノが気合い入れてやりすぎたんだね。まあ、いざという時に足りないってことがないって考えれば良いんじゃない？」

大量のポスターを抱えた少女二人が視界を塞がれながら歩いてきた。相当な重量だがウマ娘の膂力ならば楽勝である。それまでは良いのだが…

「あ、危ない!!」

前から声が聞こえる。そこにいたのは少女。同じくトレセン学園の少女である。歩く少女と声の主からはそれなりに距離が離れている。これならば猶予は幾らでもある…と生徒の方に目を向けていたことが悪手だった。

「げ、ターボ、上！上！」

「上？……………へぶあ!!」

相方の少女の言葉に青い少女は上を向いたが時既に遅し。黒い帽子は少女の顔面に直撃していた。視界が塞がれた反動で抱えていたポスターは散らばり、少女は尻餅をついた。

「だ、大丈夫!？」

「あちゃー……」

少女がムクリと起き上がると件の覆い被さった帽子を手に取った。

「上ってこういうことか……これは、貴方の?」

「う、うん。ごめんなさい……」

「いいよ。状況的にわざとじゃないのは分かるし。はい、これ。」

少女は帽子を持ち主に渡して、立ち上がった。

「ネイチャ、ごめん、拾い集めるの手伝って。」

「はいはい、そういうと分かっちゃいましたよ。……つと、これなら直ぐ集められそうだ。ラツキーって言うって良いのかな。」

散らばったポスターは奇跡的に片手で集めきれそうなため直ぐに拾い集めることが

出来た。

「気を取り直して行こうか。」

「そだね。まずは食堂あたりかなって思うんだけど。」

「目立つところから行こう。それと、貴方。」

「え……？」

置いてけぼりの帽子の持ち主に青い少女は薄く笑いながら声を掛けた。

「その帽子、汚れなくて良かった。貴方にとっても似合っているから。……それじゃあ。」

青い少女は小さな体躯だが、力強さを感じすらさせる背中を向けて帽子の少女の元から去っていった。随伴の少女も同様に帽子の彼女に背を向けた。

「似合ってるかあ……んふふふ……」

嬉しいなあと帽子の彼女はにやけつつ、本来の道を進み始めた。そして足元で何か踏んだのに直ぐに気が付いたのだった。

「……むん？……『チーム・カノーパス』？」

非常に達筆で書かれたそのポスターを拾い上げ、帽子のウマ娘ははて？と首を傾げた

のだった。

「やはりレースの経験はレースでしか積みません。レースに出るべきでしょう。」

「その理屈は分かるけどまずは基礎も作ってないとネイチャさんとしては一着とか入賞どころの話じゃないかな？」

「レースに多く出るのは賛成。下手な弾だろうと数が多ければ多いほど良い。当たりさえすれば少なくとも名前は売れそうだけど…」

むうと考え込むツインターボ。

「でも、一着は一日にして成らず。基礎を固めなければレースでも力は発揮できない。私たちはそれぞれに課題抱えてるから…」

ターボはネイチャを見つつ。

「ネイチャは全体的に安定した走りだけどここ一番というところで追い込みをかけられる決定力の足りなさ。」

「うっ…気にしてることを。」

「私は決定的に欠けてるのはスタミナ。イクノは…言わなくても自己分析してるか。」

「…一応してはいますが。参考までに教えてください、ターボさん。」

「…じゃあ、これは主観だけど。基本的に先行してるから差しも問題なくいつてる。けど、イクノは一度抜かれてからの追い込みには正直弱い。前半にパワーを持つていかれてるからかな。」

「…その通りです。まだ身体は万全ではないのもありますが、それが私の克服すべき課題です。だからこそ実戦に勝る鍛練はないと私はレースに出るべきと主張します。」

「いやいや、そこは恥かかないように克服してからするべきでしょ。」

「…正直私はもう少しで良いからスタミナをつけたい。大逃げも上手くないかないし。」

「あの一…皆さん、とりあえずトレーニングしませんか…?」

#3 I, ll Never Giveup!

それは昨年のこと。ツイインターボは有マ記念に初出場し、最初こそ大逃げで快走を見せ、離れていたが、第四コーナーに差し掛かると持病のごとく、貧血が発生。そしてそのまま激しく失速し、結局最後は17着と惨敗に終わった。なお、その後は症状が悪化し、ツイインターボは復活までひたすらトレーニングを積んでいた。それが彼女の現状である。

「……………」

そしてそんなツイインターボが今やっていることはトレーニングではない。

勉強である。勉強である。ノート片手に問題集とにらめっこしながら、眉間に皺が寄っている。ちなみに、今の時刻は午前2時を回った頃である。ルームメイトもとくに寝静まっており、寮全体がむしろシーンと静まり返っている。そんな中に動くのはこのツイインターボをおいて他にいない。これは賢さトレーニングの一環ですか?いいえ、自習です。

ツインターボがやっているのは今度の定期試験に向けた自主勉強に他ならない。普通こんな深夜にやるべきことではないのだが、ツインターボは並々ならぬ理由があり、睡眠時間すら削って勉強に勤しんでいる。

「……………全問正解、か。」

一度シャーペンを起き、ふうとため息をつく。時刻は2時35分。ツインターボの目には疲労が明らかに浮かんでいた。8時から3時間、走り込みをし、そこから2時間入浴を挟みつつも今、彼女は勉強に励んでいた。

「……もう寝よう。」

ここまでやれば流石に今は大丈夫だと確信したツインターボは欠伸を噛み殺して、音も立てずベットへ入った。

(…要領悪いなあ。)

眠る前の頭でツインターボは己の要領の悪さを嘆いた。ツインターボは元々頭の良いたとは言えない。むしろ小学生の頃は頭が悪いと言っても差し支えはなかった。しかしある時の心境の変化が彼女を優等生たらしめていたが、地頭の良さは向上するわけ

はない。それでも成績上位に食い込んでいるのは全てにおいて努力と回数で補っているからだ。

「…考えても仕方ない。」

起きるのは6時だ。朝のトレーニングを欠かすことをするわけにはいかない、とツインターボは眠りに落ちていった。

目が開いた。時計を見る。…5時53分。3時間と少しほどの睡眠時間で彼女は覚醒に導いた。

そんな生活じゃ確実に寿命を削るだけだが彼女にはそんなことは最早問題ではない。ジャージに袖を通し、ツインターボは音もなく消えていく…と思われたが。

「……ターボちゃん…?」

しかし、何と言うことだ。ルームメイトを起こしてしまった。彼女を起こさないように目覚ましもかけずに体内時計頼りで起きたというのに何ということだ。

「…ごめん、ホワイト。起こしちゃって。」

「…ん…?」

しかしルームメイトはまだ夢の中から完全には覚めていないようだ。そんなルーム

メイトを背に、このまままた眠るだろうと確信し、ターボは部屋を後にすることにした。

「ターボちゃあん？」

「…いつてくるよ、ホワイトストーン。」

朝のランニング。それは普段のトレーニングの一環。そして、何より朝の寝惚けた目を覚ませるために風を浴びるという行為だ。ツイントターボは本来、寝起きが良いとは言えない。むしろ寝れるならば寝ていたい。しかし以前の彼女ならばともかく、無垢ではいられなくなったツイントターボはそんなことは出来なかった。これも必要なことなのだから。

「フツ…ハツ…ハツ…」

朝イチから全力で走るわけにもいかない。息を整えることが今は必要だろう。生き急いでいるツイントターボも流石に朝イチからエネルギー100%では動けない。

「ハツ…フツ…！」

と、そんな折。自身と共に並走する存在が現れたことに気が付いた。その人物は…

「メジロマックイーン…さん。」

「おはようございますわ、ツインターボさん。」

メジロマックイーン。名門のメジロ家のウマ娘。現在、最も注目されているステイヤー。名優と呼ばれる素晴らしき競技者。

「マックイーンさんも、自主練ですか。」

「ええ、その通りですわ。貴方も朝から精が出ますね。ツインターボさん。」

実の所を言うと、ツインターボとメジロマックイーンがこの河川敷で会うのは初めてではない。マックイーンもかなり熱心に練習に取り組んでいるだけあって、朝練にも手を抜かない。故に朝練のランニングで被ることも多い。

「…マックイーンさんは次の大阪賞に出るんですでしたっけ。」

「ええ、良くご存じですわね。ツインターボさんは今度が復帰レースでしたわよね？ 昨年の有マ記念では御愁傷様でした…あのような悲劇があるだなんて言葉ありませんわ。」

「…あれは私自身が招いた結果ですよ。私の方こそ見苦しい場面を見せまして、すいません。」

この二人、一見接点がないように見えるが実は去年の有マ記念を共に走っている。結果は二着と十四着というドベと上位だったが。それも全てはあの発作が起ころなければと惜しまれるものである。

「貴方の前半での加速。私もあれには詰めようと思っても詰めきれませんでした。ステイヤーの名が泣きますわね。まさか、本人のトラブルで先頭を取ろうなど。」

「勝負は時の運…ですから。それを手繰り寄せたメジロマッククイーンさんの実力の内…でしょう。」

メジロマッククイーンはその大逃げを何処か、チームメイトの先輩、サイレンススズカに重ねている節がある。破滅的な大逃げではあるが、ツインターボと似通った点が多い。

「どうでしょう？ここは並走に付き合っけて頂けますか？」

「…いいよ…良いですよ、私も貴方とはまた走りたいと思つてたところだから。」

「…敬語、別にしなくても構いませんのよ？」

そしてツインターボにブーストがかかる。一気に加速。朝から全力を出さないという言葉は廃止した。何故ならばこの機会を逃す手こそないからだ。

「…やはり速い、本当に病があることが惜しいですわ…ねっ!!」

そしてマックイーンも全力で駆け出した。必要なのは、走ることなのだから。

『逃亡者』。それがツインターボの異名だった。あのサイレンススズカのように異次元のと付かないのは彼女が大差か惨敗かしかないからだ。ムラつけが強く、実際に才能もあるのだがツインターボは体力に恵まれてはいなかった。

体育の時間。ウマ娘にとって普通の運動ではただただ簡単なものになりがちだ。故に少しヒトには重いものがウマ娘の適量となる。この日は中距離走だった。

「よーし、今日もこのテイオー様が一位取っちゃうぞー。」

トウカイテイオーと当たった三人のクラスメイトはマジかよー、むりー、とかそんな悲鳴に近い言葉が漏れている。トウカイテイオーの才能は誰しもが知る所であり、あの

G1ウマ娘に勝てるか！と匙を投げ出すものもいた。しかし、一人だけそんな弱音も悲鳴も漏らさずただ膝を伸ばしていたウマ娘がいた。

『位置について、用意……ドン!!』

担任の掛け声に合わせて、皆が一斉に走り出した。テイオーは先行するためスピードを上げて……その横を青い風が通り抜けた。

「嘘っ!？」

テイオーは思わず驚愕の声を上げた。てっきり自分がこのまま独走でかけるものと思っていた彼女は思わぬ伏兵で呆気に取りられたが、直ぐに詰めようとする。しかし

(差が……縮まらない……!?)

いや、それどころか引き離されている？とテイオーは無意識の内に恐怖した。テイオーの意地が何としてでも抜かせと叫んだ。しかし、縮まらない。いくら、たった1200mでも離されるのは許したことはなかった筈だ。

だが、その差はあっさりと縮まることとなる。最終版、目の前の青い閃光が一気に減速したからである。

(…え?)

更に困惑するトウカイテイオー。そして困惑の内にゴールインした。

「ゴール、流石のタイムね、トウカイテイオーさん。一着よ。」

(…いや、違う。ボクは——)

ボクは敗北してる——決定的に。

(…ツインターボ。)

おそらくナイスネイチャの友人で席が近いウマ娘だったか。その少女に初めて帝王は興味を抱いた瞬間だった。

「えー、前回の抜き打ちテストですが満点を取ったのは…トウカイテイオーさん、」

(まつ、当然だよね!)

「と、ツイインターボさん。おめでとうございます。」
（…！ツイインターボ…！）

「定期試験、一位はトウカイテイオーかあ…流石の首席というか…何かあそこまで凄いと対抗する気が失せてくるよねえ」

「それはそう。でも次席も惜しいところまでいったんだっけ？」

「そうそう、二点差。ツイインターボだけにね。」

（ツイインターボ…！）

「エアクルーヴ、ツイインターボを知っているか？」

「確か、昨年の有マ記念に出ていた生徒でしたか。それがどうか致しましたか、会長。」

「いや、似てるのだよ。君のアメリカにいる友人に、良くな。」

「それは、サイレンススズカにですか？」

「嗚呼。」

（ツイインターボ！）

「やはり、スタミナこそ劣るものの最大加速時ならばあのスズカさんにも劣らないと思いますわ。」

「スズカさんの方が速いですよ！」

『ありがとう。スペちゃん。そう言ってくれて。でも実際に走ってみないとそこは分からないわ。』

「それにしてもマツクちゃん、気にいってんのか？そのダブルターボつての。」

「ツインターボさんですわ、名前を間違えるのはさすがに失礼が過ぎますわよ、ゴールドシップ。」

（ダブルターボ!!…あれ?）

トウカイテイオーは急速にダブルターボもといツインターボという存在を意識し始めた。彼女の周りにはツインターボの話題にはことかかさなかったからだ。

「ねえ、ネイチャ。」

「何?テイオー。」

「ネイチャから見たツインターボってどんな子なの?」

というわけでツインターボの友人にして、テイオーの友人のナイスネイチャに聞くこ

とにした。

「驚いた、どうしたの急に。」

「うーん、理由はともかく。…教えて?」

「むー、そう言われると急に困るなあ…。まあ、そうだねえ…アタシから見ればテイオーもターボもキラキラしてるけど…何て言うか、ターボは危ういかな。何時もハードトレーニングだし、糸が切れたように倒れたこともあるし。しっかり者つてのは間違いないんだけど危なっかしくて目を放せない子かなあ。」

ネイチャはうーんと言葉を振り絞りながら答える。テイオーの耳にもツインターボが保健室の住人であることは聞き及んでいる。

「間違いなく才能もあるし、大成出来ればダービーウマ娘にもなれるとは思うんだけどあの貧血体質さえなければなあ…」

「…そんなに身体が弱いんだ?」

「弱いなんてもんじゃないよ。本人が我慢しすぎるタイプだから急に倒れるのよ、これが困ったのなんの。」

ま、それを含めてもチームだからねとネイチャは首を振った。

ツインターボは才能あるウマ娘らしい。実際に重賞を取るし、G1を獲れるだけのポテンシャルはあるのだが、身体の弱さだけが恵まれていない。それが結論だった。だから一部のトレーナーの間ではこう呼ばれているらしい。『非業の天才』と。

トウカイテイオーは面白くなかった。自分が一着なのは変わらない。だが、何時もその後ろにツインターボの名前はついてきた。だからこそ。

「ボクがナンバーワンだって、証明したい。」

今までライバルの足りなかつた彼女のウマ生に急に大きな炎が灯るのだった。

——ダブルターボ、何時か雌雄を決しよう。

#4 Re:birth

「さあ、福島競バ場、芝1800メートル。天気は曇り、バ場は良好。福島民友カップの開催です。出場ウマ娘を紹介します。1番人気、昨年の有マ記念以来、休養をしていたツインターボが一年ぶりに姿を現します。堂々の一番人気での入場です。」

『逃亡者』、一年ぶりの走りに注目ですね。」

「2番人気、コールドストリーム。3番人気にクレイブウエールとなっております。各ウマ娘、ゲートインしました。そして：各ウマ娘、綺麗にスタートしました。：さあやはり一番に躍り出るは一番、『逃亡者』ツインターボ。得意とする逃げを披露します。しかしこれは少し掛かり気味か？続くは9番、4番。：第二コーナーを迎えました。しかし各ウマ娘まだ誰も仕掛けません。先頭は依然ツインターボ。今日も快調に飛ばしております。何バ身離れているか今の段階ではとても分かりません。」

「ツインターボは今まで第三コーナーの終盤にはスタミナ切れを起こしています。勝負が動くのは第三コーナーでしょうか。」

「さあ…第三コーナーに突入しました。ツインターボ、変わらず飛ばす！一人早く第三コーナーの中腹へ…ここで各ウマ娘、追い上げてきた。ツインターボのスタミナ切れを狙いに来たか。…おおっと、9番 ラビットボウル！ツインターボの背後に食らいつく！ツインターボ、ここでスタミナ切れか…減速が始ま…おおっとここで更にツインターボが加速する！ラビットボウルをどんどんと離していく。そしてたつた今、第四コーナーを駆けている！」

「スタミナの問題を克服したツインターボは更に加速を可能にしたようですね。」

「そして残り2000！しかしツインターボの背後には誰もいない！ツインターボ、速いぞ！他のウマ娘を寄せ付けない速さでツインターボ、今一着でゴールインだ!!」

歓声が上がる。…一年ぶりに復活したツインターボは他の9名のウマ娘を寄せ付けない速度でゴールインした。以前抱えていた問題であるスタミナも克服されており、スタミナ切れが予想されていた場でなんと更に加速することすら可能としたのだ。

「…ターボ、凄く調子良さそうね？トレーナー。」

「当然ですよ。今のターボさんの完成度ならばこの程度ならば相手になるはずもありません。重賞も狙えたでしょう。」

「しかしそれでは何故、福島民友カップに？ターボさんならば更に上を狙えたというのは同意しますが。」

「まずは…印象作りから入るためです。これからターボさんには重賞に出てもらうためまずは確実に制覇できるところを。今のターボさんにはこのレベルのウマ娘では食らいつけるはずもないというのは予測済みです。…そして一着を取ってしまえば『逃亡者』の復活はそれを見ていた人々から知らされるはずです。」

「おい、見たか？あの走り。一年ぶりだったのに凄く加速じゃなかったか？」

「ああ、そう思う。…今までのツインターボは体力が足りずに失速が多かったが今回は尽きると思ったところで更に加速した…これなら成れるかもしれない。」

「なれるって、何にだよ？」

「あの『異次元の逃亡者』の再来にだよ。」

「…と、このように更なるレベルアップを遂げたターボさんは話題を攫うのはまず間違いないでしょう。もともとある程度は目立っていたウマ娘ですので圧倒的な勝利を飾れば話題になることはそう難しくない。それに一年ぶりのレースということも箔が付く。」

「それで？それで？ターボが勝って話題になってどうするの？」

「ターボさんの望みを叶えるだけですよ。」

南坂はウイニングライブを行うツインターボを見ながら静かな言葉で締めた。…ツインターボが生きているということ刻む、その事に静かに協力するために。

「チーム・カノーパスか…。」

スピカのトレーナー、沖野は夕刊の一面を眺めながらほうと呟いた。

「ナイスネイチャ、イクノディクタス、マチカネタンホイザ…それにツインターボ。どれもパツとしてないように見えて勝つところは勝つて、何より善戦が凄い。それにスター性のあるウマ娘もいる…か。」

夕刊の一面は福島民友カップでツインターボが堂々と復活した旨が伝えられていた。

「グレードが付かなかつたとしても中央。決して弱いウマ娘つてわけではない。それを一年ぶりのウマ娘がぶつちぎるか…南坂の奴、どんなマネジメントしてるんだつて…。」

沖野トレーナーの意識は同僚の優男、南坂へ向けられていた。ツインターボの圧倒的

な勝利は一部とはいえすぐに話題となり、彼女に新たな異名が付き始めているのは沖野の耳にもすぐに入ってきた。

『最速の機能美の再来』。…それが誰を指すか、それは沖野は良く知っている。

「スズカの再来…とは言うが、確かにスズカに似通った所もある、あるが決定的に何かが違う。」

先頭の景色を譲らないサイレンススズカに比べ、ツインターボの走りは何かを決定的に欠いていた。

「…いや、でも一つ似てるな…あの時のスズカか。」

『沈黙の日曜日』と呼ばれたあの時。サイレンススズカの走りは死を纏っていた。実際にスペシャルウィークが居なかつたら死んでいただろう。その時の走りにツインターボの走りは似ていた。

「まさか、そんな。」

沖野は馬鹿らしいと笑った。まさかツイインターボがいつも死にそうに走ってるわけでもあるまいしと一笑に付した。…が、それが実際に正しいことであるとは、彼は知らない。

「…しかしまずはテイオーとマックイーンのことを考えないとな。カノープスの難敵なのは間違いないが…。」

「まずは1勝。」

「おめでどう！ターボ！3コーナーでの更に加速凄かったよお!!」

「…ありがとう、タンホイザ。」

「おめでと、ターボ。レースの最中貧血とか起きなかつた？」

「おめでどうございます、ターボさん。スタミナトレーニングの成果が着実に表れていましたよ。」

「イクノもネイチャもありがとう。…うん、大丈夫。ちよつと苦しかったことは否定できないけど貧血みたいなフラツて来たことはないよ。1800メートルなら大丈夫。」

レース後、チームカノープスは合流し、共に祝勝会を行っていた。実はこの時、ターボは嘘を付いている。

(…第三コーナーでの加速は…スタミナは余っていたし、脚も残せていた。ただ…心臓は張り裂けそうなくらい痛みを…)

あの場面、ツインターボは更に加速をしたが心臓が処理の許容範囲を超えて鼓動がとても早くなっていた。それに痛みもあつたが、痛みなどとうに慣れたツインターボにとってその程度は障害と成り得なかつただけだ。

(身体の調子も良いし、コンディションも悪くない。それにスタミナが付いていることも実感できる。ただ…心臓だけ、心臓だけが保たない。)

ターボがウマ娘として仕上がれば仕上がるほど痛みは強まる。ウマ娘として完成されたツインターボに一体心臓はどれだけ持つだろうか？などと考えると恐ろしくなる。

「ターボ？」

ネイチャが心配したように声をかけてきた。しかしツインターボはその内面の不安を微塵も感じさせないように。

「…いや、何でもないよ。私は正直多くは食べられないから何を食べるかを考えてただけ。」

「あー、そういえばターボって少食だよねえ。ウマ娘って少なからず大食いだと思ってたんけどターボって普通のヒトより食べてないんじゃない？」

「……流石にそれは………ないと思う。」

ツインターボはウマ娘の食べる量より遥かに少ない。というか普通のヒトの女性が食べるよりも少ない可能性すらある。

「食欲が余り無いだけだから…」

（あの時からずっとね…）

ツインターボの胃袋は8歳の時から膨らむことをやめてしまったのだから。

「トレーナー。」

「何でしょうか、ターボさん。」

「今度の休みに外出届けを貰える？」

「構いませんよ。しかし何処に？」

「…実家に。母さんに話したいことがあるから。」

「……………分かりました、申請は私が代わりにやっておきますよ。」

ツインターボの実家は府中からそう遠くない多摩市に位置する。元々は宮城県に住んでいたが8歳の時にここに引っ越してきた。これだけの範囲ならばトレセンに電車通学出来るがそれでも寮に入っているのは訳がある。

「……………ただいま、母さん。」

「お帰り、ターボちゃん。この前のレース見てたよ。凄かったねえ。」

…初老のウマ娘。この人物がツインターボの母親だ。昔に比べて随分と老け込んでしまったように見える。心労によりここまで老けてしまったのだが、その心労の元は……言うまでもないだろう。そして、加えてもう一つ理由がある。

「…これからも勝つから、見ててね。母さん。」

「楽しみねえ…さ、ターボちゃん。あがつてね。」

実家に帰る。数ヶ月振りの我が家に入る。それだけの行為なのにツインターボは何処か惜しむような気持ちに陥る。

（…私はあと何度この塀を跨げるのだろうか。）

それは三女神のみぞ知るところだ。

「ターボちゃん、お団子食べる？昔から好きだったでしょ？」

「…食べるよ。でもまずは手を洗ってこないと。」

洗面所に向かうツインターボ。手を入念に洗っていると、二階から一人の人物が一階へと降りてきた。

「おつとこれはヒーローのお帰りかあ。本当におめでたいねえ、ターボ。」

「…サウス姉さん。…そうだね、皆にもお祝いされたよ。めでたいことにね。」

「…チツ、可愛げのない妹だね。何か親愛なるお姉さまに言うことがあるんじゃないの

？」

「無いよ。何も無い。私から貴方に言うことなんて何も無いよ、姉さん。…母さんを悲しませる貴方にかかる言葉なんて無いよ。」

「…お前っ!!」

それはウマ娘だった。ツインターボより一回りほど上か。

サウスベイ——ツインターボの直接の姉。

レースの才能には恵まれたが身体に恵まれなかったツインターボにたいして、非常に健康的なウマ娘として生まれたのにレースの才能はミミも持たずに生まれたサウスベイ。サウスベイは才能の溢れるツインターボに嫉妬心を抱き、敵視している。

そして、一方でターボもすっかり落ちぶれた姉が母を悲しませる要因であることも加味して、軽蔑している。…完成しうる最悪の姉妹関係がそこにはあった。

「…用がないなら消えて。…完成しうる最悪の姉妹関係がそこにはあった。それを決めるのは父さんであつて私じゃないから。…だから、せめて私の目に映る場所にいないで。」

「フフフ…本当に可愛げのない妹だこと、そんなにまた病院に送られたい?」

「やめておいた方がいい。鍛えている私と姉さんじゃどちらが有利かなんて論じるまでもないから。」

「……………チツ。アンタ、本当何時か後悔させてやるからね。」

「後悔なんて今さらするわけないよ。」

捨て台詞を吐き、姉は消えていった。

「ターボちゃん、サウスちゃんとお話してたの？」

「…うん。大丈夫だからね、母さん。それよりも聞いて欲しいな。」

「うん、どうしたの？」

「これ、今度のレースの優待券。G3だけど重賞に出るから…見に来てくれる？」

「…もちろんよ。ターボちゃんは偉いわねえ。」

「…偉くないよ。」

——偉くなんかないよ、おかーさん。ターボは最悪の親不孝な娘だよ。

…その言葉を口にする気は弱った母親の姿を見て、霧散した。

#5 Blown away

年を超えて、1月5日。ツインターボは復帰後始めての重賞にへと挑むのだった。

「ツインターボ！脚色は衰えない！更なる加速！ツインターボ、8バ身差でゴールイン！逃亡者ツインターボ！復帰後、初の重賞制覇だ！日刊スポーツ賞金杯、制したのは『逃亡者』、ぶつちぎりのゴールインだ！」

「よし！良かったよターボ!!」

「これでまずは重賞一つ制覇ですね。GⅢと言えど重賞の制覇は高い宣伝効果を持つでしょう。」

「ガハッ!!ゴホッ!ゲホッ!!」

「ちよつ、ターボ!!大丈夫!?!」

「ターボさん、しつかりしてください!...担架を早く!!」

「くっ.....ぐう.....がっ.....」

日刊スポーツ賞金杯、初の重賞制覇を果たしたツイインターボはゴール後、ウイニングライブをする前にターフに特大の血を吐き出した。観客はその様子に騒然とする。

ざわざわ——

「おい、どうしたんだよツイインターボは？」

「あれって、血!? あんなに吐いて大丈夫なの？」

「どう見ても大丈夫な量じゃないだろ! めちゃくちゃ苦しんでるし何が起こってるんだ!」

「し…なくちゃ…ういにん…ぐらいぶ…。」

ガガツ、血液が混じった口の中では上手く言葉が発音できない。しかしツイインターボはそれでも立ち上がろうとしていた。

「何言ってるのよ! ターボ、すぐに病院に行くのよ!」

「…ねいちゃ、言ったでしょ。…ウイニングライブは…しようしやの…義務だつて…」

「言っただけど! それとこれとは話は別!」

「…責任もってほしかったなあ…ガハッ、ゴホッ！ゲホッ！うっ…」

びちゃびちゃびちゃ。更に口から逆流した血液が漏れ出る。心臓の鼓動が早すぎる。物凄く痛い。どうやら型落ちの心臓は回数を以て何とか処理をしようとしているらしい。身体に負担とか考えず。

「ターボさん…担架を、早く！」

イクノが叫ぶ。担架はまだ来ない。ツインターボの呼吸は更に荒くなり、そして顔色もどんどん血の気を欠いていく。立ち上がろうと思っても立ち上がることが出来ない。このまま死にそうと言っても説得力がありそうだ。

『た、大会委員会からのお知らせです。今回、一着だったツインターボですが、急病によりこの後のウイニングライブには出場できません。』

そして漸く来た担架によりツインターボは運ばれていった。今日のヒーローのお祝いムードから一転、中山競バ場はお葬式ムードに包まれていた。…この一件はツインターボの異常性を表に顕在化させる始めての出来事と後に語られるようになった。

「…トレナー、ターボは本当に貧血だけなの？」

ネイチャが問う、チームカノープスが今いるのはターボが担ぎ込まれた病院。その病院の待合室だ。

「…あの症状は貧血だけでは説明が付きません。倒れるだけならばまだしも。…あのよう吐血を伴うなど。」

「ターボ、大丈夫かなあ…？」

イクノとネイチャの疑惑の視線が南坂に向けられる。南坂はいつもの笑みを崩さず、そして冷静に言葉を返す。

「貧血です。…仮に私がおかを知ってても私には知らせる権利を持たないですよ。」

「…ターボが死んじやうだとしても？」

「…お答えしかねますね。」

南坂は何も喋らない。それだけはチームカノープスの面々は理解した。

「…じゃあ、質問を変えるけど。ターボは大丈夫なの？」

「意識も保っていますし、血液も足りています。容態は安定していますよ。」

「良かったあ……」

マチカネタンホイザはホッと胸を撫で下ろした。疑惑の視線を向けていなかった彼女は純粹にターボが心配だったのだ。

「ごめん、話したくない。」

ツインターボから得られた解答はそれだけだった。ネイチヤは直接ターボから聞いたです方向にシフトしたがそれは無駄に終わりそうだった。

「確かに私は隠していることもある。けどね、だからこそ絶対に答えたくない。」

断固して答えない覇気を感じさせる。実際ツインターボもここだけは譲る気はない。幾ら親しくなっても、ターボはその一線だけは決して越させなかった。

「……これだけは話せないから。」

絶対に言わない。自分が近い未来に死ぬなどと絶対に言わない。それはターボの矜持だった。

「…分かったわ。これ以上は聞かない。」

ネイチャも聞き出さないと諦めたようだ。ただしと言葉を続ける。

「ターボ、アンタ、暫く休養ね。」

「…まあ、ドクターストップもかかっているから。良いけど。」

「あ、勿論、ハードトレーニングなんてもつての他だから。」

「…ダメ。」

「やるのがダメ。」

「ダメじゃない、やらなくちゃいけない。」

「ダメに決まっているでしょ。」

「無理でも押し通すから。」

「無理と無茶の境目も分かってないのを野放しに出来るわけないでしょ。」

「……………むう…」

「……………ぬう…」

「二人とも、一旦そこまでにしよう？一応ここ病院だし、他の患者さんに迷惑懸けちゃうんじゃないか？」

「マチカネタンホイザさんの言葉の通りです、お二人とも、ここは仮にも公共の場であることをお忘れなく。…それにターボさんもネイチャさんもらしくくないですよ。」

「

ネイチャとターボがにらみあつてるとマチタンとイクノの仲裁が入る。

「…らしくないか、確かに少し私は意固地になつてた。暫く休養は取るよ。けど二週間、二週間後にはトレーニングを再開するから。」

「はいはい、分かつたわよ。こうなつたターボはもう走り抜けるだけだから止めてもしょうがないのよね。——だから、アタシも手伝うわ。」

ネイチャがやれやれと首を竦めた後、真剣な目線をターボに向けた。マチカネタンホイザとイクノもうんと頷く。

「次は3月にG2だもんね！ハイペースにならずにしつかり練習しよう！頑張ろう、えい、えい、むん！」

「ご心配なくターボさんに最適なメニューはこの私が考えます。何よりも怪我などさせません、レースに万全を期して挑めるように私がサポートします。勿論、トレーナー

も。」

「…みんな。」

良いチームメイトに恵まれたたとツイインターボは己の幸運に感謝した。

「…だからこそ、だからこそ私は走らなくちゃいけないんだよ。」

自身に言い聞かせるように。

ここまで自分の積み上げてきたもの、背負ってきたもの、これから背負って行くもの。全てをツイインターボはその小さな背中で背負い込もうと決心した。他者に失望させないように、そして何よりも自分自身に失望しないように。

「良い友を持ったな。」

「…来ていたんですか。……シンボリドルフ生徒会長。」

「莫逆之友。チーム・カノープス。中々、どうしてか見所がある。——ところで、ツイインターボ君。来た理由は分かるかな？」

「…真意の問いただし——っていうところですか。」

「高材疾足。ご名答だ。話してくれるか？」

「…良いですよ、貴方にならお話しします。」

チーム・カノープスが帰った後の突然の来訪者。勇猛果敢とした雰囲気を凜然と纏う完璧な生徒会長。シンボリドルフだ。

シンボリドルフは手頃な椅子に座るとベッドの住人となっているツイーターボから話を聞き始めた。

「…医者からは無茶をし過ぎだと釘を指されました。このままだと、更に寿命を削ることになると。」

「…更に、か？」

「更に、です。元々二十歳までしか生きられない身体でしたけれど、このまま無茶を押し通せば…。」

「…構わない、人払いは済んでいる。言ってくれ。」

「——長くて3年。或いはもつと短くなるかと、そう言われました。」

「……………」

「……………」

重い沈黙が支配する。空気もどんどん重くなる。このままでは永遠と話が進歩しない。

「…ツインターボ君。もしもという仮定で聞いて欲しい。…もしも君がレースをきつぱりとやめるならば安息のある余生を過ぐせるならば——」

「愚問ですよ、生徒会長。答えはノーだ。私はそんなものいらぬ。そんなものを望みはしない。」

「…しかし…。君は」

「…私はもうとつくに覚悟してるんですよ。こんな身体に生まれた以上、何時死ぬかなんて予測も出来ない。だから、一秒後に死んでも良いように。覚悟してるんです。」

ツインターボがピシヤリと言い切る。そして鞆に仕舞っていたものをシンボリルドルフに突きつけた。

「これを何だと思えますか？…遺書ですよ。私は常に遺書を持ち歩いています。何を切欠に死ぬかわからないこの身で私は走っていますから、それこそ一つのレースが終わったら死ぬかもしれない。…だから伝え忘れないように遺書を普段から持ち歩いています。」

「…そこまでして君が走りたいのは歴史に名を残すため、か？」

「そうですよ、それが私の最期の野望です。だけどそれだけじゃない。」

ツインターボはシンボリルドルフの言葉を肯定した後、更に否定を重ねた。

「…走らなくなったウマ娘なんて、その時点で死んだようなものですよ。私は生きる屍になんかになりたくない。…死ぬならば走ってる内に死にたい。それがウマ娘の本質っていうものじゃないんですか。」

「…君の言う通りだ。」

…ならばもう私から言えることはないなとシンボリルドルフは観念した。

「会長が生徒を思ってるやっつてるといふのは理解できません。…でも、私はもう価値のないものはいらないんです。」

すいません、とターボは陳謝した。そして、ルドルフは独り言のように話し始めた。

「戯言半分のように聞いてくれるかな。」

「…良いですよ。」

ありがとうと会長は始めた。それは彼女の独り語り。

「百駿多幸。それが私の理想だ。この世の全てのウマ娘が幸福に暮らせる世。それがどれ程困難な道であろうというのも、夢物語なのも分かつてはいるが、やはりこういった目標は掲げずにはいられない。」

「……リーダーって言うのはそういうものなんじゃないですか？」

「ああ、そうだ。思想なき長など意味を成さないから、確かにそう言った意味で理想を掲げるのは正しい。だからこそその傲慢があった。私は初めて君のことを知った時、哀れだと思ってしまった。君の境遇は恵まれないものだ。確定した寿命など、残酷だと思っただ。」

「……………」

「それは私が恵まれていたからの傲慢だった。私は持っている側のウマ娘だった。自負するのは気恥ずかしいが、それも特大の持っている側だった。……その憐憫は見下しとも気が付かずに。だからこそ聞きたかった。」

「何を、ですか。」

「君は自分の境遇を嘆いたことは、ないのか？」

……シンボリルドルフの質問にツインターボは溜めた。そして眉が悲しそうに下がり、

答えた。

「…嘆いてますよ。しよつちゆう…けど、仕方ないんです。幾ら不公平だと思っても、恵まれてないと思っても変わらぬ——だから、私は自分が不幸だとは思わぬようにしてゐるんです。こんな体質を引いてしまったのも…元は身から出た錯でしょうし。」

「…それはどういふ意味で——」

「…そのままの意味です。私は生まれた時から他者を害して生きてきたんです。母さんは危うく私を産む時に死にかけました。それが原因でレースに出られなくなり、引退しました。でも、産まれた私はそんなことも知らない無知で蒙昧な子供だった。お世辞にも私は良い子供ではありませんでしたから。」

…声が細くなる。

「ワガママで聞き分けがない。その癖、好き嫌いは多いし、落ち着くことすら出来ない。そんな子供、正直居なかつたでしょうね。姉さんが大人しい子供だったから余計に。」

「…しかし、子供とはそういうものだ。」

「…そうなのかもしれませぬ。でも私は産まれた時点で一人の夢を奪っている。いや、一人だけじゃなくて、母さんのファン、母さんに関わっていた人たち。…母さんは

夢を見せていました。そしてそんなウマ娘の姿に夢を見た人も少なくなかったです。……けれど私が産まれたからそんな人たちの夢を全部奪ったんです。」

「はあ、とため息をついたターボ。最早その瞳に悲嘆の色はない。

「……だから、これは報いだと思っています。私が奪ってきた夢の全ての、罰だと。……しかし我ながら本当に可愛くない子供でしたよ。」

「……君はまだ十分に子供という年齢だが。」

「……そうですね。世間ではまだまだ若造です。……でも、もう私は子供じゃいられないんです。」

「——あの日から、ずっと。」

#6 blessing and Emperor a
nd……

「君の目指す道は修羅の道だ。トウカイテイオーのように並々ならぬ才能と努力と、そして何より運を持ち合わせていなければ君の望みは達成されない。それでも君はその道を進むと言うのだな？」

「今さら引き返すことは出来ません。才能が無くても、運が無くても、それを覆すほど努力すれば解決しますから——私、死ぬほど努力しますから。」

病室での最終問答、ツインターボは流麗なる生徒会長の前に啖呵を切った。いくら厳しい道とはいえ、不可能ではないと。

「…その死ぬ程という言葉が誇張ならばどれ程楽だったのだろうか。」

そう、誇張表現でも何でもなく。ツインターボは努力してるのだ。死ぬ程に。

「ふんぬぬぬぬぬぬっ……ぬぬおっ!!」

その日、ツインターボはとてでもないが年頃の子女がしているいい声と顔をしていなかった。放送事故ものである。

「ほらー、ファイト！」

「あと半周です。」

「ターボ、気張れー！」

一方、チームカノープスは野次を飛ばしていた。

ツインターボが今やっているのはパワートレーニングの一環、『根性の巨大タイヤ引き』である。秋川理事長が乗り回しているアレのタイヤをロープで縛り付け、そして自分自身に巻き付け、引き摺る。シンプルながらにキツイトレーニングだ。

「ターボさんのスピードは誰しもが認めるところです。しかし問題点は一つ、一度差し切られたら、差し返すだけのパワーが残っていないことです。それにスタミナも逃げで消耗するため十全とは言えない。」

「どうしたの急に。」

「故にこゝこゝ一番での底力は残しておき、差し返せる程のパワーを得てもらいます。ター

ボさんは先頭にいる分には強いですが先頭から外れると急に弱体化するため、その欠点を遅かれ早かれ克服する必要があります。次のGⅡ、GⅠほど一流のウマ娘が揃っているとすべきではないですが、それでも悔れない。ターボさんのスピードならば通用するとは思いますが、不安点は解消するべきでしょう。」

「イクノ、誰に喋ってるの……？」

「それにパワートレーニングでありながらスタミナの点をカバーできるのも都合が良い。」

「まー、要は時間無いから欲張ってトレニングしよーってことよね。」

「ターボ！あとちよつとだよー！がんばれー!!」

巨大タイヤを巻き付けターフを一周。2400のためかなりの苦行である。しかし、ターボはノーとは言わない。

（今は何でも良い、とにかく最短で——私は最強のウマ娘にならないといけない!!）

ズリズリズリ。鈍い音を立ててもタイヤは進む。この小柄な身体の何処にそんなパワーがあるんだと疑問視されるのは当然だが、ウマ娘なのでそんな理屈は関係ない。

ゴールは僅か。ロープが巻き付いてるお腹痛いと思いつつもツインターボは本来自分にはない筈の末脚を発動させる。——これはレースに使えるかもしれない。

「ぬ”お”お”お”お”お”っ!!」

到底女の子が出して良い範疇を超えている野太い声を出しながらツインターボは今、その巨大なタイヤ引きを終えた。そしてロープを外し、垂直に地面に向かって倒れた。びたーんと倒れたツインターボは力無きまま突っ伏した。腕が痙攣するかのようにつくピクと動いてる。

「た、ターボ!!」

「メデイック!メデイック!!」

「大袈裟ですよ。お二人とも。」

「逆にイクノは何でそんなに落ち着いてるの!?!」

「……ここが限界ではないことは見極められているからです。確かに今は疲れています、直ぐに復帰しますよ。とはいえ、少し休憩は挟みますが。」

「当たり前だよ!?!」

ちなみにターボは血の代わりに泡を吹いて倒れていた。

ざわざわがやがや。今日も今日とてトレセン学園付属の食堂は大盛況である。

ウマ娘は基本的に莫大な燃費が求められるためそのためのガソリンとなる食事も多い。故にトレセン学園食堂の厨房は大忙しなんだろうなあと何処かの葦毛を思い出しつつ、ツインターボは周囲に人だらけ、もといウマ娘だらけの食堂で食事を摂っていた。

ちなみに今日の昼食は米、並盛より少し少なめ、焼き鮭、味噌汁、漬け物の定食である。米を少なめにしてるのはツインターボの要望で食べる人によってはメガ盛りもある。彼女は極度の少食のため、ウマ娘の食べる量を知っている人たちからすれば驚きものだ。

「あ、あの！他の場所が空いてなくて、その…相席しても…良いですか？」
「え？ああ、構いませんよ…貴方は。」

確かに今、食堂はほとんど満員のため相席してでも食べるのは効率的だ。ターボもそれは理解してるためその申し出を受け入れた。その人物は

「貴方は…ライスシャワー先輩。」

「…ふえっ!？」

黒髪のウマ娘は山盛りの米を揺らして困惑した。

「…改めてまして、ツインターボです。宜しくお願いします、ライスシャワーさん。」
「…え、えっと宜しくね？ライスのことはライスで良いよ…?」

対面してるライスシャワーとツインターボ。ターボは先輩であるライスに対して敬意を払っているが、ライスは逆に萎縮してる。

「…そうですか。ではライスさん。」

「な、何かな。」

「何かを聞いたような顔をしています。」

「そ、そうかな?」

ターボの指摘通り、ライスは今現在、何かを物申したような態度をしていた。それを看破されたライスはとぼけることもせず。

「…言ってみてください。ここで我慢されてもお互いのためにもならない。」

「え、えつとね。じゃあ…何でターボ…さんはライスのことを知ってたのかなって…。」

「…ライスさん。」

「…えっ!？」

ターボはターボで信じられないような物を見る目をしていたが、少し呆れたようにため息を吐いて、説明した。

「あなたが、菊花賞でミホノブルポンの三冠を阻んだ話は有名ですよ…正直、今最も注目されてるウマ娘の一人と言っても良い。私もクラシックシリーズを走ってるウマ娘ですから、そんな貴方を知っていない方が無理がある。」

ライスは言葉を聞きながらどんどんと耳がしょぼんと縮んでいつてしまった。ライスシャワーは元来、自己評価が決して高いとはいえないウマ娘のため、客観的な評価を聞かされると恥ずかしさに苦しむのだ。

「…有力なウマ娘をマークするのは普通にやるべきことです。…ライスさん?」

「は、恥ずかしい…」

そんな意図せず高い評価を聞かされたライスは顔を赤面させているが何処か嬉しさを含んでいたが——直ぐに。

「…でも、ライスが勝ったからブルボンさんの三冠を邪魔しちゃって…それで皆の夢を…」

直ぐに暗い表情に戻ってしまった。

「……似てるなあ。」

「…えっ?」

ツインターボはその視線に近しき者を見る意味を含んでいた。そして改めて

「ライスシャワーさん。」

「ひゃい!？」

「…ライスさん、貴方は勝ちたいんですか?」

「…そ、それは。」

ライスは言葉に詰まった。逡巡もある。気弱だが優しい女の子は…

「…か、勝ちたいよ。勝ちたいけど、勝ったら皆の夢を…」

しょもと落ち込むライス。焼き鮭を崩しながらターボが言う。そしてターボはピシヤリと言いきってしまう。

「ならば勝てば良いじゃないですか。」

「で、でも！」

「勝つたら台無しにしてしまう——確かにウマ娘に夢を見る人は少なくないですが、一度負けてしまったから壊れる夢なんてそんなものは壊れて然るべきだ。」

一度言葉を切り、目を瞑るターボ。なおこの間も箸は止めてない。

「それに。貴方が自分のことを夢を壊す悪役だと思つてしまうことがよくない。夢を壊してしまつたのならばそれ以上に夢を見せようと——そういう主役ヒーローになつてしまえば良い。」

その意気込みは何処かターボにも重なる部分があつた。夢を背負つた分だけ夢を見せる。そういう信念が彼女にはあつた。

「ライスが悪役ヒーローじゃなくて主役ヒーローに……。」

「まあ、私の浅い言葉のアドバイスなんか気にせず、貴方自身が考え、判断し、そして決断することですから。大事なことは他人に任せず、自分で決める。それが大事だと私は思うから。」

「自分で決める……。」

ライスを食べる手を止めて深く考え始めた。ターボはこれで良いと完食し、立ち上がった。

「ともあれ、私はこれで失礼します。いつかレースで当たることもあるでしょうし、その時は本気で来てください。勝ちたいっていう気持ちは私も同じですから。」

「…うん、ありがとね。ターボさん。」

トレイを持ち、片付けようとしたその時。

「あーっ!! やつと見つけた!! ダブルジェット!!」

「ツインターボ!! 一文字も合っていない!!」

「…それで、これは一体どういうことですか? ゴールドシップ…と、テイオー。」

トレセン学園、付属レース場。そこにいるのはお馴染みチームスピカの面々である。なお、一人だけ違うウマ娘もいる模様。

「!!」

モガーツ!!モガーツ!!とじたばた暴れてるのは拘束され猿轡を噛まされている青いウマ娘である。

「いやな。アタシはテイオーが心配で心配で仕方ないんだ?無敗も三冠も失ったテイオーは新しい目標に向かって歩き出してる。それは喜ばしいけどな?だからこそアタシはジंकクスを破ってもらいたい。というわけで適任を拉致してきたというのがゴルシちゃんのナイスな作戦というわけよ!」

「…では何故私も呼び戻したのですか?今は療養中のためトレーニングには出ないとお伝えしてある筈じゃないですか。」

「でもよ、マックちゃんも気になるんですよ?学年首席と次席のレース。」

「そ、それは気にならないと言えば嘘にはなりますが…」

猿轡を自力で脱出したツインターボは体勢を引き起こして不満そうに言った。

「…聞いてれば私が走るような前提で言ってるじゃないですか。それ、私がノーと言ったらそれまでなのでは。」

「そんなノリの悪いことを言わないでくれってよ、ここはアタシたちのチームメイトのためにお願いだ!」

「……ツインターボさん、誠に申し訳ないとは思いますが。私からもお願いしたいのですわ。」

「……良いでしょう。実際私にとつても願つてもない機会です。トウカイテイオーもそれで良いんですか？」

無言で準備体操をしていたテイオーにターボは問いかける。

「ボクもそれで良いよ。芝2400、良バ。これ以上無いくらいのコンディションだしね。」

「…分かった。なら競い合うことにしよう。…その前にこれ、ほどこいてくれない？」

「…おつと悪い。」

拘束を解かれたターボはジャージに着替えると指定された場に着いた。

「ツインターボ、キミとは前々から共に走つてみたかつたんだ。手加減なしでお願いするよ。」

「…それはこちらの台詞。トウカイテイオー、手加減なんてしたら承知しないから。」

「二人とも準備は良いか！このコインが落ちたらスタートだからな！」

ゴールドシップがコインを持つ。そしてコイントスの要領で宙を舞い、地に落ちた。

両者が駆け出す。

やはり先に躍り出たのは逃げのツインターボだった。

「…やはり速いですわね。ハイペースで掛かりと思われてもおかしくなくらい飛ばしていますわ。」

「いや、でもスズカよりは押さえ気味じゃないか？アタシが見ただけの感想に過ぎないけどよ？」

「スズカさんは逃げウマとして生まれてきたかのような方ですから。最近だと…パーマーに近いのかしら。」

親戚の爆逃げ娘を思い浮かべるマックイーンとそれをニヤニヤした目で見つめるゴールドシツプ。

「マックちゃん…今、上手いこと言ったな？ウマだけに。」

「…？」

——トウカイテイオーが勝負を仕掛けて来るのは恐らく中盤。イクノが言っていたように彼女の足はバネが柔軟だ。加速が化け物的と言っても過言ではない。どれだけハイペースで飛ばしたとしても終盤には絶対に追い付いてくる。ならば——

——逃げウマ娘ならばボクは知ってる。それも特上の。スズカはこのペースで飛ばしても更に加速出来る。そんなスズカの前にボクが躍り出るためならば

第一コーナーを曲がるテイオー。その先に8バ身先にはツインターボ。相変わらず飛ばしている。このまま進めばターボは既に三コーナーへ進む。

(……)でー)

三コーナーを迎えたターボの背後をテイオーが追走する。そして爆発的に加速する。

「ここで仕掛けますか、テイオー。」

「おおつ、相変わらずやるな、テイオー。どんどん差が埋まってるな」

ターボとテイオーの差が縮まる。5バ身、3バ身、1バ身と詰める。そして追い抜いた。追い抜き4コーナーへと突入する。

「ダブルエンジンの奴のペースが落ちてるな、序盤で飛ばしすぎたか?」

「ツインターボですわ、失礼にも程があるでしょう、ゴールドシップ。…でもまだ余裕があるように見えますわ。」

第四コーナー。残り500メートル。テイオーの3バ身ほど後ろを捉えているター

ボ。

(…待っていた、この場面。)

そして、ターボが先ほどテイオーが加速したように更に更に加速した。差を詰める。横に並ぶ、テイオーもそれに気が付く。

(差しだつて!?! ツインターボは『逃げ』だけじゃないつてことかい!?! くっ…でも、ここで負けたくは…ないなあ!!)

それは彼女の意地か、更に加速する。テイオーの底力にターボも心からの称賛を送る。

——この土壇場で更に加速。さすがにトウカイテイオーはやる。でもこの場面で余力を残しているのは…

「ターボの方だ。」

残り100。遂にターボはテイオーを抜かす。残り50。しかしツインターボは急に失速をした。残り25。ツインターボは激しく転んだ。

マックインソンとゴールドシップも慌てて外野から飛んでくる。テイオーもその姿を見ればさすがにゴールどころではないと急停止した。

ターボの周りに三人が慌てて駆け寄ってきた。

「ツインターボさん、大丈夫ですか!？」

幸いターボは咄嗟のところで受け身をとっていたため大事には至ってない。しかし

「お、おい大丈夫か? すげー鼻血出てるけど…」

顔から突っ込んだため鼻血がドバドバと出てる。それ以上に苦しそうに心臓を押さええている。

「…はあ…はあ…トウカイテイオー…貴方の勝ちだよ。」

息を切らしながらターボは勝者へ向けて言葉を贈った。

「…そんな状態で勝ちって言われてもボクは納得いかないよ。…それに今日のボクは完全に負けた。」

「勝ちも勝ち。納得いかない?」

「いかないね。こんなことで諦めなくちやいけないのはボクは絶対に嫌だ。だから、」

「…分かった。再戦があるなら期待してて。今日はもう…無理だから…」

「…待つてるから。諦めないことが大事だから、ボクは諦めないよ。」

——諦めないこと、か。

その言葉の意味が大きくなるのはもう少し先の話。

#7 This is…

トウカイテイオー、三度目の骨折。その悲報が知れ渡るのに時間はそうかかることはなかった。三度目の骨折、そしてそれに伴うトウカイテイオーの引退を示唆する風潮。それがどんどんと世論になるのにツインターボは嫌気が差していた。

「よっ…ふっ…これなら動けそうだ…少し休憩にしよう…。」

そのトウカイテイオーは既に骨折は治ったが走らぬ日々が続いていた。夕暮れ時、トウカイテイオーはダンスの練習をしていた。そしてひと段落して休憩するためにベンチに座った。…その背後に立つ影が現れたことをテイオーは感づいた。

背中合わせとなったその人物からスポードリンクが渡された。

「飲む？」

「飲む。」

一言だけ返し、彼女から差し出されたスポーツドリンクの封を開け、口をつけ始めた。背後の彼女は立ったままのようだ。

「世間では色々言われてるみたいだけど。」

「そうだね、皆正式な情報がないから好き放題、言いたい放題だ。困っちゃうよね。」

テイオーは苦笑しつつそんな声色を漏らす。

「それで、貴方はどうなの？」

「どうって?」

「…どうもこうもないよ。」

「…キミつてば結構意地悪なんだね。ツインターボ。」

「知らなかったの？ 私は捻くれた子供だから。」

ごくごくくと飲む音が背後から聞こえる。テイオーは受け取ったスポードリンクを見つめていたが視界が震えてきた。

「…認めたくないよ。やりたかったことが出来ないって言われることがどれくらい辛いものか、皆わかかってない。」

声が震える。瞳から落ちるのは涙か。

「…諦めるの?」

「…諦めたくないよ。でも、あきらめるしかないんだよ…! ボクは…もう、走れないんだよ!!」

次第に抑えていたものが決壊し、テイオーはその思いの丈をぶちまける。背後の少女

は何も反応を見せず、静かな声で返すだけだった。

「…そう、じゃあトウカイテイオーは？つきだつてことか。」

「……何を…?」

テイオーは震える声でその少女に問いかけた。

「あなたは言った。諦めないことこそが大事だつて。だからそんな貴方が諦めるのは他ならないあなた自身への裏切り。…じゃあ嘘つきつてことだよね。」

「…良いよ、何とでも言つてくれよ。ボクはもう大？付きさ。自分で発した言葉すら守れない、そんな負け犬だよ。自分が情けなくなるくらい、愚かしいウマ娘だよ…!!」

その無慈悲な言葉はトウカイテイオーを深く抉る。後ろの少女はふうーと息を吐くと

「…今度のオールカマー、私は出る。」

「…それが何だつてんだい？」

「あのライスシャワーも出る。メジロマックイーンを破った彼女は今や最強のウマ娘の一角と言ってもいい。」

「…そうだね、ライスは強いよ。それにシスタートウショウも出る。みんな手ごわいレースになるよ。GⅢとは思えないくらいレベルの高いレースだ。」

「だから、私は逃げる。」

「…え？」

その言葉に今まで背中合わせだったテイオーは彼女の方へと振り返った。

「逃げ切る。誰にも追いつけない、そんな異次元の逃げをして見せる。」

「…無理だよ、出来っこない。」

テイオーは吐き捨てた。

「その言葉、覚えておいて、トウカイテイオー。あなたが吐いたその言葉を、良く。」

彼女はヒラヒラと手を振り、そのまま消えて行ってしまった。テイオーはそんな後姿をただ見つめているだけだった。

「…シンボリルドルフ生徒会長、秋川理事長…私からこの人生を賭けての一世一代のお願いをどうか聞いてもらえますか？」

「…ライスさん。」

「ターボさん…今日はよろしくね?」

9月19日。中山競バ場。…オールカマー当日。

「ライスさん、あなたとの初めての走りが今日であることを惜しいとは思いますが、…
負けない、誰にも。」

「…ライスだって、もう誰にも負けないんだから。」

「良いよ、勝負と行こう。でも勝負にもならないほど離して勝つ。これは宣戦布告だ、ステイヤー。差せるならば差して見せろ。」

「…!」

「…ターボさん。私はあなたの事情を知っています。知っているからこそ手加減はしません。たとえ貴方が絶対に勝たなくちゃいけなくても私は勝つ。」

「良いよ、イクノ。戦いはそういうものらしいから。でも、それだからこそ私が勝つ。」

「…ずいぶん自信ですね。…いや、今の貴方にはそれを言い切るだけの力が。…それにしてもネイチャさんやトレーナーは無事に行えているんでしょうか。」

「…あー…大分無茶言ってる自覚はあるけれど。…それでも、私はあの人たちを信じているから。」

「…そうですね、私たちは勝負です。」

『中山競バ場、オールカマー。各ウマ娘たちのゲートインが完了しました。』

ファンファーレが鳴り響く。ここまで来たらあとは流れるだけ呑み。余計な雑念など不要、必要なのはこの勝負を尽くす力のみ。

『各ウマ娘…一斉にスタートしました!』

求めるものは圧倒的な勝利のみ。些末なものなど切り捨てろ、極限まで神経を研ぎ澄ませ。

先行争いが始まる。ツイインターボはどんどんと加速する。それこそが彼女の十八番…否、彼女にはもうそれしかない。

『ツイインターボ、どんどんと加速していく。一番手を取ったのはツイインターボ。二番手にハシルシヨウグン。外からモガミキツカ…ホワイトストーンも上がってきた。そして内側六番手、ゼツケン八番のライスシャワー。その後ろに追走するイクノデイクタス。』

ツイインターボは更に飛ばす。掛かりと思われるほどどんどんと飛ばす。

『ツイインターボ。更に加速する、しかしこれは少しハイペースか?』

『従来の彼女と比べても掛かり気味ですね、一息どこかで入れるのでしょうか。』

——一息？休憩？…否、そんなものは不要。

全ての神経を足に回せ、今は他の物に力を入れるな。ただ走るためだけに人生の全てを裂け。

『ツインターボが大きく二番手以下に差をつけて逃げています！後続はライスシャワーを警戒してか、まだ勝負を仕掛けません！』

…好都合さ。来ないならば私は進むだけ。

『さあこの場内のどよめきは…ツインターボのとにかく逃げ!!何バ身離れているか今の段階ではとてもはわかりません！』

——おかしい、ターボさんの今までのレースならこんなペースで飛ばしていたら

いつかスタミナが尽きてしまうはず。ライスがそこに付け入る隙は幾らでもあると思っただけは…

後方集団でライスシャワーは徹底的にマークされつつも爆速で逃げる青いウマ娘を見て、疑問を呈していた。第三コーナーを通るライス。それによろやく彼女は真意に気が付いた。

(…まさか!!)

「…ッ!!」

—— やつてくれたね、ターボさん…!

ライスシャワーがその足に込める力が更に伸びる。前方を走るウマ娘をそのステイヤーはねじ伏せる。どんどんと加速する。

『……でライスシャワー、出てきた!モガミキツカを抜き去る!』

——全て布石だったってことだね——!!

——ペースを抑えて走ってきたとはいえ、流石につらいな…それに背後から黒いプレッシャーが肌にビシビシと突き刺さってくるようだ。彼女は本気で差しに来ている。油断すればあつという間に食らわれてしまいそうだ。でも…でも、だからこそ。

「逃げ甲斐のある!!」

『ツインターボ!!更に早くなる!!前半のハイペースとはいったい何だったのかと思うほどツインターボ、更に加速する!ツインターボだけが!早くもツインターボだけが第四コーナーの曲がり角に!』

——心臓が張り裂けそうだ。全身の血管が今にも全て沸騰しそうなくらい熱い。この熱で全て無に帰してしまいそうだ。

血液が逆流する。口から赤いものが零れ落ちる。血などいつものことだ。目が赤く染まる。問題ない、今更視界なんて無くたってゴールへの道など感覚で掴める。

『ライスシャワー、これはもう届かないか!』

——ああ、これは勝てない。：彼女は覚悟の量が違う。：私などもう届くはずもない。勝とうなど烏滸がましい言葉だった。：でも良い、今はそれでいい。今は彼女に贈ろう。

「ッ…行けッ!!ターボ!!」

——走れ!!

それは有り得ない光景だった。青いウマ娘はその目から血を流しながら、口の端に血を垂らしながら。走る、誰もいない先頭の景色を独占しながら。

——見ているか、トウカイテイオー。これがお前の不可能と断じたものだ。これがお前が無理だといったものだ。これがお前が言った言葉だ。これがお前の教えた意味

だ。これが――

「これが――諦めないっていうことだ!!」

――トウカイテイオーツ!!

『見事逃げ切ったぞ逃亡者ツインターボ!! 11番、ツインターボ! 今…ゴールインだ! 後続に…12バ身の差をつけた!!』

それは後に語り継がれる伝説となった。そのウマ娘はまるで閃光のように走ったと――長く語られる伝説の始まりだった。

「…ゴホツ…ガハツ…ウエツ…!!」

激しく咳き込みながら血の塊を吐き出したツインターボ。その様子を一人のウマ娘は見ていた。

「…ターボ、大丈夫ですか？」

「…イクノ…ああ、うん。今回は——まだ大丈夫かな。」

メガネのウマ娘の手を借りて立ち上がる少女を黒髪のステイヤーはじつと見ていた。

「…凄いな。ターボさん…ヒーローみたい。」

後に彼女たちはもう一度ぶつかる。…そのことを彼女はまだ知らないが——再戦の期待に胸を躍らせる自分がいることにライスシャワーは驚いた。

あの伝説となったオールカマーから一月後。トウカイテイオーは引退をしなかった。その結果だけ聞くとツインターボは満足したように練習に戻った。

「みんなすごい熱気だねトレーナー…。」

「そうですね、天皇賞秋——この季節において最も皆が注目するレースが行われま
すからね。」

「それにイクノにネイチャ…ターボも。この天皇賞に参加できてるもんね！」

「喜ばしいことです。あまりパツとしないと言われたチーム・カノープスも既に過去の
話。重賞制覇とこのようにG Iに出場できる土台が作れたことで私たちの名前も売れ
てきました。」

東京競バ場、そこにチーム・カノープスのマチカネタンホイザとトレーナーの南坂が
いた。

『17名のウマ娘が姿を現しています。1番人気、漆黒のステイヤー、ライスシャワーで
す。』

『本日もかなり研ぎ澄まされています。』

『2番人気にはブロンズコレクター、ナイスネイチャが入っています。』

『汚名返上となるか注目したいところです。』

『そして3番人気にはターフの飛ばし屋、ツインターボです。』

『一月前でのオールカマーで見せた圧倒的な逃げはこのGIでどのように振るうのでしょうか?』

だ。
タンホイザは喜んでいた。二番人気、三番人気をチーム・カノープスで得られたから

「やったよね、トレーナー。これでもっと私たちが注目されるね!」

「ええ、本当に喜ばしいことです。…これでターボさんの悲願にも近づく。」

『17名のウマ娘が今一斉にスタートしました！さあやはり先頭集団に躍り出てくるのは三番人気、三番ツインターボ。今日もターボエンジン全開で飛ばしてまいります。』

「やっぱり最初につくのはターボかあ。」

「予想できたことですね。皆は最初から飛ばすわけでもない…しかしターボさんならば話は別です。最初から全力で飛ばすのは彼女らしい。」

「でも今回はG Iだよ？通用するのかなあ？」

(…体の調子が軽い。足取りも驚くくらい軽い。今までの苦しみが嘘のようだ。)

ツインターボは先頭を走りながら独自する。今まで自分を苦しめてきた心臓の痛み

が嘘のように引いている。むしろ好都合ではあるのだが急に痛みが引いたことへの疑問は尽きなかった。だが彼女は飛ばす。体は思考とは別に加速する。

「…まるで痛みがない。」

走りながら、彼女は過去最高潮だった。これならばGIも獲れるかもしれない。そう甘い期待をした時：彼女は何となく心臓へと手をやってみた。それは普段痛みを抑えるように見えるかもしれない動作。なんて事はない、ただの確認のつもりだった。

「え？」

その心臓は鼓動を止めていた。そして彼女の意識はここで暗転したのだった。

『ツインターボ…転倒した!! ツインターボ、激しく転倒した!! レース場を大きくそれで激しく転倒した! 大丈夫でしょうか!』

「ターボッ!」

「ターボさん!!」

同じレースに出ていたイクノデイクタスとナイスネイチャはチームメイトの危機にいち早く察知した。だが、観客席から飛んできた言葉に。

「いけません!! ネイチャさん! イクノさん!! 走る足を止めてはいけません!!」

「トレーナー…!」

普段から考えられないほど大きな声を立てて叫んだのは南坂だった。…ネイチャとイクノは心配を振り切り、走る。…そしてレース場に参加ウマ娘以外のウマ娘が走っていた。観客席から飛び込んできたそのウマ娘は…

「ターボッ!!!」

マチカネタンホイザだった。ツインターボの元に彼女は観衆の目なども気にせず全力で走り出した。

「ターボッ!…トレーナー!…早く!…救急車を!!」

タンホイザの絶叫がその日の東京競馬場へ響いたのだった。

—— 明るい光。差し込むのは何か。

視界が黒一色から急に色彩を帯びた。今まで真っ暗だった世界は急に絵の具で染め

上げられたかのようにだった。

「…ツ…。」

「…ターボッ！」「ターボさん！」

その言葉に意識が覚醒してきた。ツインターボは目覚めた。その視界が彼女のチームメイトを映した。

「…みんな。」

「ターボ、アタシが分かる？」

「ターボさん、痛いところは？」

「ちよ、みんなうれしいのは分かるけれどターボが大変だよ。」

「…ネイチヤ、分かるよ。わかるから近い。イクノ…全身が痛いよ。タンホイザ…お氣遣いありがとう…。」

全身が鈍い痛みが走るようだった。それでも彼女はまだ生きている。それがうれしかった。

「良かったよお…。」

「…」時期はどうなることかと。

「…ほんとにね。」

三人のウマ娘は安堵をした。

「ねえ、今って何時？」

「…ターボ、アンタまる一日は意識不明だったわ。このくらいで目覚めれるのは流石ウマ娘ってことかねえ？」

ネイチャの言葉にターボも安堵した。このまま一年眠りっぱなしとかだったら話にもならんと思っていたところだった。

「まあ…頑丈さには定評があるから。」

「…む、それはいけませんねターボさん。頑丈さならば私を差し置いて名乗るなど。」

「はは、そりゃごめん、イクノ。」

鉄の女の異名を取るイクノデイクタスにターボは片手をあげてごめんというジェスチャーをしようとした。

そう、しようとしただけだった。

「…あれ？」

「ターボ、どうしたの。そんな顔して。」

「やはりどこか痛みますか？」

「だから痛むのは全身だって…どうしたの、ターボ？」

少女は、諦めることをしなかった少女は。…初めて彼女らの前で…泣きそうな声を漏らした。

「…おかしいな…どうやっても…」

動かないんだ、私の右腕が……。

8 yet…

その日、トウカイテイオーはとある病室にへと来ていた。

「……………」

病室の中には青いうま娘が一人、スプーンを右手に掴もうとしていた。そして崩れ落ちていた。

「…まだ。」

左手で落ちたスプーンを拾うと右手でまた掴もうとしている。

「…やあ、少しいいかな。」

「…トウカイテイオー。」

来客に気が付いたツインターボはそのスプーンを使う動作を止めた。

「あなたが見舞い？ 私なんかには興味がないと思ってたよ。」

「キミの言葉は時々ボクに痛烈に刺さるなあ。」

確かに興味はなかったがそれは既に過去の話だ。テイオーは座った。

「…右手が動かないんだって？」

「…そう。あの秋天で私は転んだ時、一時的に心停止していた。その影響が脳に影響が出て、右上半身の神経が麻痺をしてる。…それが重なって動かない。」

ツインターボは語る。それは皮肉にも2か月前とは対照的な光景だった。あのオールカマーの前、夕焼けのベンチの日の対比だった。だが、その時とは決定的に異なることが一つだけあった。

「…でも諦めてないみたいだね。」

「…そうだよ、あんな啖呵を切った以上私は絶対に諦めない。腕が使えなくても戻って見せるから。」

その意志を感じさせる言葉。だからこそツイインターボはツイインターボというウマ娘の所以だった。

「快復は？」

「それこそ奇跡でも起こらない限りだつてさ。」

そつかとテイオーは言った。そして言葉を少し切り、独り言のように漏らし始めた。

「…ボクさ、尊敬する人が三人いるんだ。」

「…何の話？」

「まあ聞いてよ。一人はボクの原初の意味の人。走りたいと初めて思わせてくれたヒト、二人目はボクの意味を作ってくれたヒト、ボクが意味を失った時に先導してくれたんだ。…そして三人目はボクに信念を刻んでくれたヒト。想いは最強だつて言うことを教えてくれた。…最近さ、ボクの周りで故障が絶えないんだ。それもかなり深刻な意味での故障が。」

…それはメジロマックイーンのことを言っているのかとターボは言葉を飲み込んだ。

「それこそ奇跡でも起きない限りつて言われるくらい。だからね、ボク…決めたんだ。奇跡を起こすつて。」

「……。」

「それじゃ、これお見舞いの花だから。…じゃあね、ターボ師匠。」

「…貴方ならできるだろうね、テイオー。………ん？師匠」

「ニシシ…意味はそうだね、また今度ね。」

ツインターボ入院から一月、世間はトウカイテイオーの有マ記念出走で話題が持ち切りだった。その情報が出る前の秋天でのツインターボの故障は直ぐにその話題に流されてしまった。…そんなツインターボの前にイクノデイクタスは現れた。

「ターボさん。この人に出来なかったのならもうあなたの腕を治す方法はないと言っても過言ではありません。…しかし確実にできるといふ保証はできません。…それでもやりますか?」

「…やるよ。何だってやる。死ななければなんだってもうやってやるさ。」

イクノデイクタスが連れてきた人物は白髪が混じったウマ娘…娘というような歳で

もない…だった。眉間にしわを寄せたその人物は如何にも気難しそうと言わんばかりの顔である。

「以前ターボさんにはお話していましたね。私は一年間停学していたと。」

イクノが語るは彼女の身の上。

「私はデビューを控えている身でした。しかし不調を感じいざ医者に掛かってみれば…私は『屈腱炎』と診断されました。」

「…それって。」

「ええ、デビューすら危ぶまれていました。…しかし私は当時、死に物狂いでとある人物を探していました。…奇跡の装蹄師と呼ばれる人物を。」

「その人が…。」

「はい、この方です。」

そしてようやくイクノはその人物へと言及した。

「私は先生の元で治療へ専念しました。その結果、一年遅れですがすっかりと頑丈な体となっております。…だからこそ、ターボさんへ紹介したのです。」

「…オイ、イクノよオ…。」

低い声はその先生から漏れ出る。

「儂は治せるのはあくまで足だ。骨折と腱断裂以外ならどんな足だって治してやるけれどよオ、流石に手は専門外だぞ。」

「……………」

「…やはり先生でも不可能でしょうか。」

「…イクノ、無理ならばわざわざ時間をかける必要もない。このお方も時間が有限だろうし、私なんかは時間をかけなくてもいい。」

「…ターボ、しかし…。」

「…すいません、『先生』。とんだ無駄足を運ばせてしまつて。」

ターボは陳謝する。とんだ無駄足をさせたど。

「待てや、小娘。」

「…先生？」

イクノは疑問符を浮かべながら先生へと疑問をもたらした。

「そう早計になるんじゃないか。出来るか出来ないかって聞かれりや————そりゃア、出来るに決まつてんじゃないか。」

「…!!」

「足も、手も。元は同じようなもんだ。ほかの生物は何で足が四本あって、人間やウマ娘は二本だと思う?…もとは手は足だったからだろ。なら儂に治せねエ道理はねエ。」

先生は断言をした。…それは暗雲に差し込んでいる一筋の希望とも呼べる光。

「だが、だ。如何せん儂も初めてだからな、絶対にとは言い切れねエ。それでも小娘——やるかい?」

先生はツインターボのその色の異なる瞳を射抜いた。

「…やりませぬ。絶対に治して見せませぬ。」

「…よし来た。ならツインターボ、退院したら儂の所に来い。留年は覚悟しとけよ。」

「……………善処します。」

「トウカイテイオー奇跡の復活ね…ハッ、ほんとうらやましい限りだよ。羨ましすぎて恨めしいね。」

…サウスベイはテレビの電源を切った。ニュースでは連日放送している内容はトウカイテイオーが一年ぶりの有マ記念を制したという速報ばかりだ。あまりにも神々しい世界すぎて彼女には嫌気が差してきた。

気分を変えるために彼女は外に出た。意味などない大した意味も持たないただの散歩である。

「ツインターボ、故障…復帰は絶望的かねえ…本当にあのお嬢ちゃんらしい末路だ。」
ハッと嘲るような独り言をするサウス。端から見れば不審者である。

姉であるサウスベイは妹のツインターボを憎んでいた。その憎悪は元を辿れば全て、レースへの嫉妬である。

サウスベイには産まれた時から頑丈な体を持っていた。その身体は大きくなり、身長はツインターボより20cmほど高くなっている。しかし恵まれていたのはあくまで身体のみだった。

「サウスちゃんは——トレセン学園は無理だね。」

小学生の時、告げられたその言葉に彼女は絶望した。一体どれだけ自分が期待を込めていたのかをその担任の一言で全てが打ち碎かれた。——トレセン学園への門戸を閉ざされたサウスベイはそのまま普通の中学校へ通うこととなった。最初はまだ気楽なものだった。この頃はターボとの関係もまだそこまで険悪なものではなかった。

「ターボちゃん！スゴいわ！これだけ速いならきつとトレセン学園だつて夢じゃないわ！」

その一言で姉妹の道は決定的に別たれた。誰よりも走ることを渴望していた彼女は他ならぬ理想を一番近い妹に魅せられ、あとは当然のように彼女は腐り落ちた。

引きこもりとなったのだ。高校への進学もしなくなった姉を母は心配した。だが、姉は母を邪険に扱い始めた。妹はそんな姉の姿を見て遂に決別した。——そうして最悪の姉妹関係は出来上がった。

故に彼女はツインターボを憎んでいた。それと同時に——

「やっぱりすごいよねトウカイテイオーは！」

「いや、マジロマックイーンの方が!!」

そんな彼女は今、公園のベンチに居た。気分転換のためである。そしてそんな彼女の前では何人かの幼いウマ娘が遊び、そして言い争っていた。

「イズミちゃんはどう思う!?!」

「マジロマックイーンの方が凄いやね!?!」

「…えっと私は…。」

気弱な少女が強気な少女二人に詰め寄られていた。どうやらファンであるウマ娘のこと語り合っているらしい。

「私はその…ツインターボさんが…凄いかな…。」

「…ツインターボ!?! パツとしないじゃん!」

「それにもう死んでるんじゃないかって話じゃん?」

サウスベイは驚いた。ツインターボにファンがいたのは知っているがそれはコアなファンが多そうだった。だがこんな幼いウマ娘の心を掴んでいるのは予想外だった。

「死んでないよ! ツインターボさんは死んでなんかないんだから!」

気弱だった少女は強気な少女たちへこれまた強気な態度で言葉を投げ掛けていた。

「…ツインターボさんはまたターフに立つんだから!」

「…ごめん。でもイズミちゃん、何でそんな微妙なウマ娘なんか!」

「…微妙じゃないよ! ターボさんはヒーローなんだから!」

「えー、でもG1かってないじゃん!」

そんな言い争いが彼女の前で今は繰り広げられていた。

「…分かってねえな。」

G1に勝てるウマ娘など、そんなものほとんどもなく一握りのウマ娘だ。才能と努力

とそして運が求められる。重賞を獲れるだけでそれはウマ娘として一流だ。1勝すら出来ずに去るウマ娘すら、いる。そして何より…ターフに上がることにすら許されないウマ娘すらいる。

「違うもん！確かにトウカイテイオーさんとかメジロマックイーンさんとかよりも目立ないけど！それでも！あの人は強いんだから！」

「…もういいよ！イズミちゃんそれしか言わないんだもん！いこう！」

「うん！」

「…あつ。」

強情な少女に二人の友達は去って行ってしまった。

「…ターボさんの逃げは絶対あのサイレンススズカさんと同じくらいだって言えるのに…」

少女は一人でいじけてしまった。

「…全然違うぜ、お嬢さん。」

「…ええ？」

「あの異次元の逃亡者と比べりゃあいつの逃げなんて大したもんじゃねえ。あいつはもつと必死に逃げてんだ。」

「…お姉ちゃん、誰？」

「アタシが誰かなんて誰でもいいだろ。ツインターボの走りはサイレンススズカと同じみたいなものじゃねえ。格が違うんだよ。」

「…む、そんなことないよ！ツインターボさんは凄いよ！」

「惨敗が多いのにか？」

「でも圧勝もしてるよ！」

「負け越してる方が多いけどね。」

「でもー！」

「いいやー！」

あーだこーだ、サウスベイは少女と大人気なく言い争っている。やがて息が切れ…

「…ぜえ…ぜえ…お姉ちゃん、私よりターボさんに詳しくない…？」

「当たり前だ…アタシほどアイツの走りを知ってる奴をいるかってんだ…けど、アンタも中々の知識だね…」

少女はにへらと破顔し、サウスも苦笑した。

「アタシはサウスベイ。アンタは？」

「…私はイズミストロング！」

妙な友情がここに生まれた瞬間である。

激動の一年は過ぎる。いつの間にか年もあと2ヶ月を残すところとなる。

「…ネイチャさん、それにタンホイザさんも有マ記念への切符、おめでとうございます。」
イクノが二人のチームメイトへ称賛を贈っていた。

「…ありがと、イクノ。まあアタシもいい加減有マになれてきたし、今回こそ行きたいねえ。」

「そうだね、私も今年こそは頑張りたいねえ…えいえい、むん！」

年末の祭典、有マ記念。その切符がマチカネタンホイザとナイスネイチャへと来ていた。ナイスネイチャは四年連続、タンホイザも二年連続の快挙である。

「とりあえず今日はパーティだね！…ターボもいれば良いんだけど。」

「ま、そりゃあ仕方ないんじゃない？今さらどうこう出来る問題じゃないんでしょ？」

「…はい、ターボさんはまだ先生のもとに居ます。定期的に連絡こそ来てますが、それでもまだですね。」

「…そつかあ…まあ、仕方ないよねえ…。」

タンホイザは意気消沈した。ネイチヤはそんなタンホイザを励ましていた——彼女に悪意が降りかかるとは知らずに。

「…何でカノープスが有マなんか…この毒蜘蛛を——。」

マチカネタンホイザ、入院。その報がやはり直ぐに世にへと知れ渡った。

「マチタン!!」

彼女はその報を聞き、飛んできた。約半年振りのチームメイトとの再会であった。

「ターボ!？」

「…タンホイザ…。」

青いウマ娘は鼻を赤く晴らした彼女と対面した。

「…毒で蕁麻疹に?」

「…うん、飲んでたジュースに何でか蜘蛛の毒が混じってて…その毒が。」

「…じゃあ、有マは?」

「…辞退するしか…。」

タンホイザは意気消沈したように語る。その声音に悔しさを混ぜ合わせていた。

「…私、悔しいよ…走りたかったよ。有マ…!」

涙をポロポロと流すマチカネタンホイザ。毒は誰かに盛られたのは最早明確なこと。

誰かの悪意によってタンホイザの夢は断たれた。その事実には彼女は泣いてしまった。

「…ねえ、トレーナー。」

「…はい？」

同席していた南坂にターボは問う。

「…その有マへの切符は学園の裁量で変えられるの？」

「はい、URAから一任されています。勿論、生徒会長や理事長の許可は必要ですが。」

「———なら、私に頂戴。その切符を。」

「ターボ……………？」

「しかし…」

「…無理だよターボ…だって、ターボは…もう一年はレースに出てないじゃん…あのナリタブライアンがいるんだよ…？勝てるわけが…」

「…既に奇跡は一度起きてる。なら私に出来ない道理はないよ。」

「でも、ターボの腕は！」

「出来る出来ないじゃない！——やるんだよ。」

ターボは少し語尾を荒らげて、直ぐに落ち着いた。タンホイザの目を見ながらターボは静かに囁く。

「…出来るかとかの問題じゃないよ。やるんだ、この命に代えてでも。」

——有マ記念まであと2月。

少女は賭ける、その命の総てを。

#9 Legends

「ねえサウスお姉ちゃん。」

「何さ、イズミ。」

「わたしね、ツインターボさんの有マ記念見に行くの。」

「そうかい、大負けする所を見に行きたいのか。良い趣味だな。」

「そんなんじゃないよ！ツインターボさんは勝つよ！だから——お姉ちゃんも一緒に行く？」

「…はあ!？」

「ねえ、ターボ。アタシたち、最初は二人だったよね。」

「トレーナー入れて三人だったけど。まあ、ウマ娘と言えば私たちだけだったね。」

「それでさ、最初の頃に約束したじゃん。ここぞという大舞台でアタシたちが当たったからお互い手加減なしで相手を撃ち落とすって。」

「…うん、したね。」

「それで、アタシたち、明日ここぞという大舞台で当たるわけだけど。」

「悪いね、ネイチャ。私が勝つことになって。」

「…勝手に決めないでよね。アタシは今度こそテツペンを獲得。——喩え、ターボが相手でも。」

「…なら、私も譲る気はないよ。ネイチャが相手でもね。」

「じゃあ、勝負だ。」

「そうだね、勝負だ。」

少女たちは拳を交わした。お互いを撃ち落とすと。

『今年もやって参りました。年を締め括る有マ記念。その栄光を手にするために13名のウマ娘がターフに続々と姿を現しています。』

有マ記念。それはウマ娘たちにとっての祭典。年の瀬に行われる自分達の力を示す

最高峰の舞台。練り上げられた至高のウマ娘たちが己の力を示すためにぶつかり合う。

「うう…皆、強そう…それにやる気が十分だ。」

「…流石は有マ、熱気が凄いですね。」

南坂とマチカネタンホイザとイクノデイクタスは客席の最前列を取っていた。

「ターボ、大丈夫かな…。」

「…右腕は動くとはいえ十全とは言えない現状です。やはり逃げが最盛期ほど戻ったとは言えない。しかし…。」

「しかし、彼女はそれでも逃げるでしょう。ターボさんはそういうウマ娘です。」

「それにネイチャも本当にやる気が十分って感じだったよね…。」

チームカノープスから出ている二人、ネイチャとターボにタンホイザは気持ちを注いでいた。

『ターフに姿を現したのは5番！ツインターボ、一年振りにターフに逃亡者が現れました！』

『怪我による復帰は絶望的と思われるかもしれませんが好走を期待したいです。』

『やる気十分、過去にないほどの仕上がりをを見せていますのは6番、ナイスネイチャ。』
『四年目の有馬でナイスネイチャはブロンズコレクターの異名を返上するのでしょうか。』

『こちらと同じく仕上がりは十全。10番、ライスシャワー。』

『ステイヤーとしての走りに期待したいですね。』

『そしてこのウマ娘は外せません！1番人気、11番——ナリタブライアン!!』
『最早貫禄すら感じさせます。』

「……………」

三冠ウマ娘、ナリタブライアン。シャドーロールの怪物。その威圧感は肌でも感じるほどだった。

——つまらん。どれもこれも私を満たす相手には足り得ない。

その内面は驚くほど乾ききっているがそれは彼女のみ知ることだ。

「…ターボさん。」

「…やあ、ライスさん。今年も有マにいるのはやっぱり凄いね。」

「ライスね、待つてたんだ。天皇賞ではあんなことになってたけど。——こうやってターボさんと戦えること。」

「…そう。期待させてごめんね。でもお待ちせ。」

「…うん、おかえりなさい。——勝負しよう。」

「——そうだね、勝負だ。」

ライスシャワーとツイインターボは短くだけ言葉を交わした。そしてツイインターボは客席のマチカネタンホイザと視線が交差した。

「……。」

マチカネタンホイザはこくりと頷き、そしてツイインターボも答えるように頷いた。それ以上の言葉は要らないと言わんばかりに。そしてツイインターボはニスネイチャに對して目を向けず己のゲート、4番へと入っていった。7番ゲートからは激しいプレッシャーが突き刺す。

「うう、本当に皆強そう——。」

「当たり前だろ。何せ最高峰のウマ娘が集まるG1——更にその中でも飛びつきりのが集まるのがこの有マだ。生半可なもんじゃ無理に決まってるんだよ。」

「…それでも私はツイインターボさんを信じるよ。」

「大負けしても、泣くんじゃねえぞ。イズミ。」

鳴り響くファンファアレ。これこそが全ての終わりを告げる音だと錯覚する程遠い音。ツイインターボは緊張も無く、そのファンファアレを聞いていた。

——アタシが

——ライスが

——問題ない。全てねじ伏せる。

——ブライアン、アンタとのタイマンはこのヒシアマ姐さんが貰う。

それぞれの思念が交差する。ターボは右手を握り締めた。まだ完全に振りきれない腕。だがそれで良い。

「…動くだけ、儲けものだ。」

そしてツイインターボは構えた。

『各ウマ娘、一斉に今、スタートしました！』

——最初から総てを！出す!!

最初から全力全開。結局それしかツインターボにはない。

『ナリタブライアン、好スタートを見せました！先行争いが始まります——やはり内から抜け出してきたのはツインターボ！どんどんと飛ばしていきます！一年ぶりのターフでもターボエンジン全開です!!』

青く小さなウマ娘はバ群から一人で抜け出す。そしてその身を風にするかのように速度を上げる。誰にも追いつかせないようにただ只管に飛ばす。

「…ターボ、すごくハイペース…。」

「オールカマーの時と同じ…いえ。それ以上に飛ばしていますね。…しかし今のターボさんの体力では尽きるのは明白では…。」

「…アイツ、後先考えず飛ばしやがってんな…」

「が、頑張つて、ターボさん!!」

『さあ先頭を取っているのはツインターボ。そのリードは7バ身。ナリタブライアンが先頭集団の前に位置づきました。ライスシャワー、ナリタブライアンの背後につく。ヒシアマゾンもその裏から来る。ナイスネイチャ、内側から先行集団に加わる!!』

——足りない。まだまだ足りない。もつとスピードを!!

『ツインターボ、更に飛ばすぞ! ツインターボ! その差は10バ身!』

心臓への負荷など心配は無用。腕が十全に動かないことも心配無用。必要なのはこの足がどれだけ早く動くかだ。速く、疾く——

まだレースは第二コーナーを迎えたばかりだ。大逃げをぶちかますツインターボの

姿に、一年ぶりのその姿に、観衆は大いに沸く。

——このレースにおいて私は道化。そもそもURR Aが私を承認した理由など都合のいい客寄せでしかないからだ。：ああ、まったくふざけやがって。

漆黒のステイヤーでもない、怪物でもない、女傑でもない……私を見ろ!!

『第三コーナーを迎え、依然リードはツインターボ。しかし後続との距離が少しずつ詰まっているぞ!』

：心臓の痛みなどとうに限界を迎えている。鼓動数が早すぎる。自分でももう心臓が動いているかは分からない。だが足は動く。それならばそれで良い。もはや生きているか死んでいるかなんてどうでもいいんだ。

——やはり誰も私の敵に成りえないか。

一方、怪物ナリタブライアンは退屈していた。：どれも自分に対して張り合いのない

ウマ娘ばかりで拍子抜けしていたと言ってもいい。だからこそナリタブライアンは動いた。

——もう喰らってしまうか。

『ああつと！ナリタブライアン！ここで動き出した！！スパートをかける！前方のツインターボとの距離がどんどんと縮む！！ライスシャワー！追いつがる！！』

…黒い怪物は動き出した、今まで溜めていた足であつという間にその先に行く青い飛ばし屋を喰らってしまった。

『ツインターボの先頭はここで終わり！！後続も食らいすぎる！！』

——青い少女は直ぐにバ群に吞まれた。…吞まれた瞬間に赤いウマ娘とすれ違う。

「…ネイチャ。」

——アタシは自分が勝てないと思ってた。アタシは自分が彼らとは違うと思っていた。主人公には絶対に成れないと思っていた。：そう、それは思い込みだった。100の努力で70の天才を打ち砕くやつがいるのをアタシは知った。それを知ってアタシは——出来ないことはないと思つた。想いは実力を超えることを——知つた。だから——

「アタシが——アタシが勝つ!!」

——瞬間、その場にいたウマ娘は幻視した。その赤い少女から燃え上がる、赤いオーラを。深紅に染まる少女の周囲を。

『……おおつと!? ここで来たのはナイスネイチャ!? ライスシャワー、ヒシアマゾン抜き去り!! ナリタブライアンに追いつく!! なんと……ここでナイスネイチャが来た!!』

「…ネイチャ!!」

「…あれは…一体…。」

「…なるほど、あれが。」

「知っているのですか、トレーナー。」

「私も人伝で聞いたことがあるだけの現象でした。領域ソールと呼ばれる…ウマ娘が極限まで高まった状態をそう呼ぶと。」

「すごいよ!!ネイチャ!!」

「ああつ！ターボさんつ!!」

イズミストロングの悲痛な声が漏れる。一方サウスベイは苛立ちを浮かべた表情を

していた。

「おいイズミ。」

「な、なに!？」

「少し耳塞いどけ。」

サウスベイは最前列で大きく息を吸い込むのだった。

——ああ、もうだめだ。一度抜かれた以上、今のターボに巻き返す力はない……それに何よりももう心臓が動くのを止めそうだ。鼓動が自分でもわかるくらい減っている。このままじゃ意識をもたない。

ツインターボはバ群に吞まれながらも懸命に走っていた。だがその視界は薄れ、もう倒れそうな状況だった。そしてこのまま倒れればその命はないだろうという確信もあつた。

——ここまでか——。

万事休すか、ツインターボはそう思った時、薄れる意識の片隅に、その言葉は届いた。

「走る意味すら忘れてんじゃねえ!! ツインターボッ!!」

…その懐かしい声が聞こえた瞬間…ツインターボは意識を失う直前、全ての力を今まで十全に動かなかった右腕に込めて。

そして

思い切り右の拳で自分の心臓を目掛けて殴ったのだった。

「お姉ちゃんおっそいー!!」

「アンタが…すばしっこい…だけでしょ…。」

それは遠い過去に思える日々。まだ彼女と仲が良かった時。

「つたく…ターボ、アンタは無駄に早いね。」

「むだつてなにさ！ターボはやくてどうぜんだもん！だつてターボだから!!」

「いや理由になつてないから…つたく、追いつくこつちの身にもなりなさいつての。」

「お姉ちゃんが追いついてくればいいんだもん！」

「それが出来てたら苦労しないつての…。」

つたくと姉はため息をつく。

「ね、ターボ。アンタさ、走るのは楽しい？」

「…そんなの当たり前じゃん！走るのは楽しいよ！」

「…そうだね、走るのは楽しいんだ。…忘れないでね、アンタは。」

…そして少女は現実に戻る。

今まで色彩を欠いていた視界が急に絵の具で塗りたくられたように復帰する。心臓に強い衝撃が走った。胸がものすごく痛い。多分骨にひびも入っただろう。

だが、もうそんなものどうでもいい。

（そうだ——ずっと忘れていた。いつからか、どうやって勝つかだけを考えていた。ウマ娘としてでもなく、競技者としてでもなく、本当に根底にあったのは）

バ群に呑まれた彼女が俄かに輝きを放つ。その口元には今まで絶対に見せなかった笑みが浮かんでいた。

「そうだ——走るのは——楽しい!!」

瞬間、彼女の周りを走っていたウマ娘は彼女から目を逸らせなくなった。…その小さな身体に青い焰が宿ったからだ。

『ナイスネイチャ!!ナリタブライアンに必死に食らいつく!さあ第三コーナーは終わりの第四コーナーに——え!』

実況すらその時には困惑の声を漏らした。——バ群から追い上げてくるものがあるからだ。

『ツインターボ…ツインターボが追い上げてきた!』

「やっと思い出したか、バーカ。」

「サウスお姉ちゃん…凄いい声だったね…どういうこと?」

「内緒だよ。教えてやるもんか。」

青き焔は、深蒼はその小柄な体軀を駆使し前へ出る。どんどんと抜き去る。もはや他など眼中にないように。

——やっぱり来た!!

黒いステイヤーはその身に再び鬼が宿る。…その蒼い逃亡者と競い合うために…しかし

「速い…!!」

青の逃亡者は黒いステイヤーをあつという間に抜かしてしまった。そしてそのまま最前列へと合流する。

——ライスシャワーもヒシアマゾンも——ナリタブライアンですらもう敵じゃない！

——ターボの本当の敵は…ターボ自身だ!!

『ナイスネイチャ!!ナリタブライアンを抜いた!その奥からツイインターボが追い上げる!!ツイインターボも今、ナリタブライアンを抜いた!!誰がこうなると予想できたでしょうか!!』

青い風は赤い風と並び立つ。視線を交わしている余裕はない。見据えるのはこのコーナーの先だけだ。

『ナイスネイチャとツイインターボ!!大番狂わせが今、起きています!!ナリタブライアン!!二人に食らいつけません!!』

「いつけえ!!」

「ど、どつちが!？」

「どつちも!!」

イクノは叫ぶ。普段の冷静さはかなぐり捨てる。タンホイザも困惑しつつ叫ぶ。

「そうだね——ネイチャ!!ターボ!!行けエツ!!」

(ナイスネイチャ——ごめん、一番あなたを甘く見ていたのは他ならない私だった。この学園で一番最初に出来た私の友達。…どこまでもあなたの走りに詳しくあったからこそ一番あなたを甘く見ていた。けれど私は幸運だ。)

こんなにも最高のライバルが隣にいたのに全然気が付かなかった!!

最後の直線に入る。ツインターボとナイスネイチャは並び立ち、そして競い合う。ツインターボのその顔にはもはや狂氣的とも映る笑顔があつた。

——ああ、本当に

「楽しい!!」

いつまでも続けていたい!!この場で終わらせるのが惜しい、惜しくてたまらない!!

——アンタの走りは誰よりも一番知ってる。

——ネイチャの走りはターボが誰よりも見てきた。

——だから!

——だからこそ!!

「負けない!!」「負けたくない!!」

『さあ残り200!!ナリタブライアン食らいつく、しかし差が縮まらない!!ナイスネイチャ! ツインターボ! 一歩もリードを譲らない! 逃亡者か! 名脇役か!! どちらが前へ出る!!』

「勝つのは——」

「勝つのは!!」

「アタシだアアアアアアアアアアアツ!!」

「ターボッだアアアアアア!!」

『ゴール!! ツインターボ! ナイスネイチャ! ゴールインしました!! 写真判定に移ります!!』

中山が静寂に包まれた。誰しもがその瞬間を望んでいた。…テツペンが決まるその瞬間を。

『一着 ツインターボ 確定』

その文字が出た瞬間…中山は盛大に湧いた。爆発的な歓声が場を包んだ。

『僅かに勝利! 一着を取ったのはツインターボ!! 一年ぶりに姿を現したツインターボ!!』

初のG I優勝で奇跡の復活だ!!』

わあああああと大歓声に包まれる中山レース場。そんな場から立ち去ろうとしている一人の少女がいた。

「サウスお姉ちゃん？ ウイニングライブ見なくていいの!？」

「…ああ、いらねえよ、そんなもん。」

「待ってよ——!!」

二人のウマ娘が立ち去ったことを気に留める人はいなかった。

「…ターボ。」

「…ネイチャ。」

赤と青のウマ娘は向かい合った。

「ナイスラン。」

「そつちこそ。」

二人のウマ娘はそれぞれ手を高く掲げると——その手のひらをお互いパシーンと大きな音を立ててタツチをした。

「…行こうか、勝者の責務へ。」

「…そうだね、アタシたちの晴れ舞台へ。」

—

「すごかったねターボさん!!」

「ま、ちよつとは認めてやってもいいかもね。」

「いやいやもう見直すなんてレベルじゃない!!」

「まったく…浮かれすぎだよ。イズミ、そこは飛び出し注意なんだ気をつけなよ。」

「はーい。」

その日のウイニングライブは伝説となった。なんとあのツインターボがナリタブラ

イアンを下し、ナイスネイチャもツイインターボと激戦を繰り広げた。堂々の一番人気だったナリタブライアンを三着に落としての驚きの一着二着だった。

——その日のうまぴよい伝説は間違いなく伝説だった。

『今日は優勝ができて嬉しかった。…私なんか期待してなかった人も、期待してくれていた人も。応援してくれてありがとう。…最後に、私のライバルへ言葉を贈りたいと思います。』

ウイニングライブ後のコメントでツイインターボはナイスネイチャに微笑んだ。

『ありがとう——ネイチャ。…そしてごめん——これで最期で。』

ブチブチブチ。そんな音をマイクが拾った。…そしてそれが最後だった。

「…つたくよ、だから気をつけろって言ったろ。」

「ああ、そうダイズミ。アタシの願いを聞いてくれよ。」

#LAST
Survivor

——今でもあの日のことを思い出す。

遠く響く歓声。何処までも沸き上がる人々、誰しもが夢見たその大舞台。

その大舞台は奇跡となり、伝説となり、そしてまた一つの絶望を刻んだ。

次第に人々の心から傷は取り除かれ、その出来事は歴史の一つとして人々の心からは風化していく。誰もが覚えていても誰もが思い出すものにはならず、やがて歴史の間隙に葬られていく。

そうやって消えていった歴史は誰かが書き留めておく。

少女は人々に希望を与え、そして魅了した。誰しもが彼女の走りに勇気を貰い、不可能を可能にする想いの強さを見せつけた。

少女は答えを見つけた。そしてその答えを手に入れるために命の限りに抗った。

その答えを手に入れる姿にアタシは張り合った。張り合えたかはた疑問だが、彼女は答えを手に入れた。

一方のアタシはまだ霧の中だ。答えを手に入れた彼女と答えを見つけれないアタシ。

——あれから二年が経った。

ナイス^アネイチャ^タはまだ、道の途中だ。

トウインクルシリーズを引退したウマ娘はレースから去るか、それとも新たなレースに挑むかを選択する。アタシが選んだのは後者だった。

ドリームトロフィーリーグ。名を馳せたウマ娘が、実力で世界を唸らせたウマ娘だけが来るのを許されるハイレベルなレース。

必然か偶然か、アタシにもその資格があった。善戦マンだか、ブロンズコレクターだが、色々言われていたが有までの入着は決して安くない。アタシもいつの間にか実力派って呼ばれるウマ娘になってたわけ。

それからトレセン学園は様変わりした。アタシは高等部に入った。勿論、カノープスの皆も。チームカノープスもあの有マでの伝説以降強豪チームに数えられるようになり、今じゃ後輩も沢山だ。南坂トレーナーも日々忙しそうに、楽しそうに過ごしてる。

「はー、さむ……こりやこの冬も冷え込むわ……」

朝と夕方は本当に冷え込むようになったこの時期。正直アタシは冬が好きじゃない。色々肌荒れにも悩む季節だ。

「ネイー！少し手伝ってー！」

「あー、はいはい。分かりましたよー、待っててー。」

親愛なる我が母君からの指名とあっちゃアタシに断る権利はない。渋々と表に顔を出す。

「お、ネイちゃん、久しぶりだねえ。」

「あらまあ、ネイちゃん帰ってたのねえ。」

「そうそう。もう帰省の時期だよ。おっちゃんにおばちゃんも久しぶり。」

適当にひらひらとかわすだけでこの人らの相手は大丈夫だ。

「ネイ、ちよつと倉庫からお酒持ってきて！」

「どれー？」

「芋！」

「りよーかい。」

スナツクのミユキママに敵う者はこの商店街にはいない。無論それは娘たるアタシにも当てはまるわけで。

「はー、ホント無駄に寒いんだから。」

店隣の倉庫をガサゴソと漁るのももう手慣れてるわけで。

「今さらだけど飲むつもりなんかもさらさらもないけど一応未成年であるアタシにお酒類使わすってどうなん？コンプライアンス的に。」

何て愚痴の一つでも漏れる。

「ま、良いけど別に。」

おかんが訴えられたとしてもそこは我関せずである。

「もー、違うよ、そこはもつとこうド派手に!!」

「そうやって理事長から没案を食らったのが過去に何度あったのか貴方はもう忘れたのですか? 兎に角それは没です。やるならば彩りを重視したスイーツのような…」

「それはそれでキミがやりたいだけじゃん!」

——お、この仲良く喧嘩してる声は。

「お二人とも相変わらず仲良いねえ」

「あつ、ネイチャー!」

「…あら、お見苦しい所を。」

「あー、別にそう畏まって貰う必要はないっしょ。ていうか生徒会長と副会長に畏まって貰ったらアタシは立つ瀬がないというか何と言いますか…」

「む、ボクたち今はプライベートだよ!」

テイオーは相変わらず元気だ。威厳ある姿になるのは一体何時になるやら。

「…ですが私たちに相応の責任がついてるのは当然ですからそれに相応しい振る舞いと…」

「もー、マックイーンは相変わらず責務とか責任とかにうるさいな!」

「いやいや、生徒会長がちやらんぼらんじゃダメでしょ。」

「むむ、ネイチャ、ボクに逆らうのか?」

「わー、暴君。」

それはもう棒読みですよはい。

「ま、仲良きコトは美しきかなって訳だけど、いっつも言い争ってるのも疲れるんじゃないの?」

「…そうですね、疲れることは否定しませんわ。」

ありやりや。

「何さー!?そこは否定してくれるのがライバルってもんじゃないの!」

「知りませんわ。」

うんうん、相変わらず仲の良いコンビだこと。

「じゃ、アタシは店の手伝いあるから。ここで失礼。」

「あ、うん。それじゃね。——ネイチャ!明日のレース、負けないからね!」

「勿論、わたくしも負けませんとも。」

「はあ…誰も彼も簡単に言ってくれるわ…」

やれやれ、皆しようがない子だ。

「久しぶりねえ、来るのが少し遅れちゃったわ。あの子があまりにもドタバタしてるから目を離せなくてねえ。」

一人の女性がとある墓石へ語りかけていた。

「あの子も今日は張り切ってたわ。…そうね、何処から話そうかしら。」

ウインタードリームトロフィー。それは歳末における有マに並ぶ祭典。有マがまだ新しいウマ娘たちが伝説を創る場とするならばドリームトロフィーは既に伝説を産み出したウマ娘たちが激突する伝説の交差点だ。

「…フム、今日のコンディションは最高ですね。やはり一日休息を挟んだのは正解でしたね。」

「…うう、でも緊張するよお。今までもこんな大舞台は初めてかも…。」

「いや、まあ…言うても今までも大舞台なんてあったからアタシは別に。」

チームカノープスは東京レース場の袖に控えていた。皆がそれぞれ覚悟の宿った表情をしている。

「ああ、緊張はしてませんがやはりそれでも楽しみですね。」

「そうだね、ドキドキするけどワクワクするよ!」

「まあ、ここは誰が勝ってもお互い恨みっこなしってことでね?」

何時も通りに冷静さを保つイクノディクタス、震えながらも闘志を震わせるマチカネタンホイザ、リラツクスした面持ちのナイスネイチャ。

「おつ、そろそろ入場か。それじゃぼちぼち行きますかね。」

ネイチャがうーんと背伸びをしてチームに告げる。

「それでは私から。」

「次は私だね!」

お先に失礼とイクノが、出ていきそして少し後にタンホイザも出て行った。

「んじゃ、そろそろ行きますかね。——ほら。」

「あの子だったら今日はすっかり張り切ってたわ。お友達と走れるのがそんなに嬉しかったのかしらねえ……。でも、その気持ちもお母さん分かるわ。」

墓石をなでながら。

「私はもう走れなくなっちゃったけど私も昔は走るのが大好きだったからね。あの子の気持ちも分かるからお母さんとしてしっかり応援しなくちゃいけないのよね。ほら、貴方も一緒に見ましよう。」

初老の女性は小型テレビの中継を繋げた。

「貴方も彼女のことをちゃんと見ていてね。」

『ウインタードリームトロフィー！年に四度の祭典がまたやって参りました！18人の出走ウマ娘を紹介しましょう！』

東京レース場。ここでは過去に類を見せないほど賑わいを見せていた。

『未完の大器、マチカネタンホイザ！新しい帽子を携えての出走です！一枠です！』
手を振りながら入場するマチカネタンホイザ。

『鉄の女、イクノデイクタスは13枠です。』

続いて入場するイクノデイクタス。

『帝王、トウカイテイオー。名優 メジロマックイーン、同時に入場です。8枠、6枠です。』

同時に並び立つ二人のウマ娘。

『サイボーグ、ミホノブルボン。祝福の星、ライスシャワーが同じく入場です！9枠、3枠です。』

頷き合う二人。

『日本総大将、スペシャルウィーク。異次元の逃亡者、サイレンススズカ！今ターフに姿を現しました。10枠と12枠です。』

握手を交わしながら入場する二人のウマ娘。

『皇帝シンボリドルフ、女帝エアグルーヴ、世紀末霸王テイエムオペラオー、光速の粒子アグネスタキオン、勇者アグネスデジタル、怪鳥エルコンドルパサー、シャドーロー

ルの怪物ナリタブライアン、理論者ビワハヤヒデ：そうそうたる面々がターフに現れました！』

続々と現れる伝説を残すウマ娘。その完成度は段違いだ。

『そして、今現れましたのは名脇役ナイスネイチャです！』

ひらひらと手を振りながら現れた赤いウマ娘。その姿に他のウマ娘に負けない歓声が湧き上がる。

「やっぱり先輩たち カッコいいなあ！」

キラキラとした瞳のウマ娘が会場の最前列で観戦をしていた。まだ始まってないの観戦とは言いきれないかもしれないが。

「大丈夫ですよ、イズミさんも焦らずとも彼処へ行けますとも。」

「それ、お世辞じゃありませんよね、トレーナーさん！」

「

「はい、お世辞じゃありません。」

「私だっっていつか必ず！」

『さあ、やはりこのウマ娘は外せません。二年前のあの日、我々はとても勇敢なウマ娘を

喪いました。その傷は癒えるものではありません。しかし、その傷みを背負い、彼女はターフにたちます。』

最後のウマ娘がターフにへと姿を現した。

「見ているかしら。」

『現れたのは——『生存者』！』

『ツインターボだっ!!!』
「——サウスちゃん。」

『さあ！各ウマ娘、ゲートに入りました！』
そのウマ娘は心臓に手を当てる。

「——一緒に行こっか、お姉ちゃん。」
『各ウマ娘、一斉にスタートしました!!』

F
I
N